

Manuel Moreno Friginals, *El Ingenio- Complejo Económico Social Cubano del Azúcar*, Crítica, 2001, 第9章の和訳

Japanese translation of Manuel Moreno Friginals, *El Ingenio*, Ch.9 “Economías y Sociedades de Plantaciones en el Caribe Español, 1860~1930”.

田中 高*

はじめに

本稿は Manuel Moreno Friginals 著『砂糖大国キューバの形成：製糖所の発達と社会・経済・文化』第9章の和訳である。本書はすでに本間宏之氏により第6章まで和訳出版されている（マヌエル・モレノ・フラヒナル著、本間宏之訳『砂糖大国キューバの形成：製糖所の発達と社会・経済・文化』、株式会社エルコ、1994年）**。しかし本間氏はその後の訳業を断念されていた。今回紹介するのは、未訳分のうち最終章の第9章である。同章が本書全体の中で重要な内容を含んでいると判断したからである。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、キューバの糖業は奴隷制に基づくプランテーションから、近代的な精糖設備を有する精糖工場に変貌した。砂糖取引もニューヨーク取引所を中心とする、グローバルなものとなった。本章では近隣の砂糖生産国であるドミニカ共和国、プエルトリコにも論及している。従来我が国におけるカリブ海域の砂糖生産については、エリック・ウィリアムズ（Eric Williams）、シドニー・ミンツ（Sidney W. Mintz）などの著作にもっぱら依拠してきたように思われるが、本章は砂糖大国キューバの視点からの分析という意味で、貴重な情報を提供している。なお本稿では、フラヒ

ナルとも親交のあった本間氏の訳語、術語、訳文を参照した。原注は（）、訳注は〈〉で示した。

第9章 ス페인領カリブ海地域の経済とプランテーション社会 1860~1930⁽¹⁾

概観

18世紀から19世紀前半には、カリブ海域における砂糖生産と取引はほとんど変化しなかった。たとえ変化があったとしても、それは砂糖生産が一つの島からほかの島に移動したか、あるいは限られた技術革新の性質によるものであった。1860年代から1890年代にかけて一世紀にわたる砂糖産業の構造は、全く新しい生産方法と取引形態、砂糖の最終製品の新しい形状、異なる容器により輸送されたことで破壊され、様変わりした。1860年代からほぼ30年間にわたる砂糖の分野で継続して生じた技術革新は、砂糖の生産者、商人、消費者に大きな影響を与えた。人間と労働との関係を緩和させ、最も古い消費習慣を変化させた。この大きな変容は同時に、その他の経済、社会、政治要因の変化の原因と結果でもあった。これは世界中で生じていた、新しい情報システム、地球規模の人口増加、科学技術の急速な発展、米国が世界の列強として登場したこと、スペインの植民地

* 中部大学国際関係学部国際学科

主義の危機とも結びついていた。

砂糖生産の各段階で、未熟練労働者による旧来の手動式機械の廃棄を促すほどの、一連の技術革新が生まれ、代替された機械はより効率的で、専門的な操作と技術的な点検を必要とする複雑なものとなった。このような機械の導入には相当額の経済的な投資が必要とされた上に、当時使われていた一連の生産設備と、従来の生産システムの下で構築された建造物の大部分を廃棄する必要があった。従って新しい企業体を、製糖所に初期の蒸気機関が導入された時のような、古い製糖所を単に近代化したものとみなしてはならない。そうではなくて、解体された古い製糖所が廃棄され、新しい種類の労働者が操作する新しい機械が、それまで設置されていたかあるいはその付近の場所に設置され、そこに新しい建造物が建てられたのである。古い製糖所の敷地内で残されたものは唯一、一般的には社会活動に使われる建物、通信のためのインフラストラクチャー、サトウキビ栽培地であったが、これは新しい生産センターの必要とするものの一部しか充足しなかった。というのは、利益を上げるには、新しい生産センターは古い製糖所に比べて、明らかに格段に多くのサトウキビの量を処理しなくてはならなかったからである。新しい産業プランテーション（19世後半以降、集中した工場基地あるいは精糖工場＝セントラルという名称となった）は古い製糖所に完全にとって代わり、より肥沃で安価な土地を必要としたのである。

したがって、量的かつ質的な変化があった。量の視点では、新しい精糖工場は、古い製糖所とは搾汁する能力とサトウキビの搾汁量においても異なっていた。例えば、1860年に近代的と称された機械化された製糖所は、平均して30から50カバジェリア⁽²⁾（425から500ヘクタール）の土地を耕作したが、1890年の精糖工場は100から120カバジェリアを扱うことが

できた。150から200カバジェリアの土地から生産されるサトウキビを搾汁する能力のあることも、まれではなかった。搾汁の能力以上に生産量の増加速度ははやかった。というのは、新しい工場では製糖所よりもほぼ倍の砂糖を溶糖することができたからである。

この生産能力の増加は集約化のプロセスを生むことになった。例えばキューバには1860年に1318の製糖所があり、およそ51万5000トンの砂糖を生産していた。1895年には製糖所数は250にまで減少したが、生産量はほぼ100万トンにまで増加した。プエルトリコでは同様のプロセスが少し遅れてから進んだが、1870年には550の製糖所があり砂糖生産量は19世紀最大の10万トンほどになった。1910年には15の精糖工場が23万3000トンを生産した。いっぽうキューバ、プエルトリコ、ドミニカ共和国〈本稿ではサント・ドミンゴ、ドミニカも同意語で使われている〉において、英領西インド諸島のバルバドスで1世紀半前に起きたのと同様な砂糖大農園の出現を生んだ。このような集約化のプロセスは社会面では、ドミニカ共和国を除いて、旧来の奴隷所有層である大土地所有者層の終わりを伴い、新しい種類の産業経営者にとって代わられた。1895年にはキューバでは、100のうちわずかに17の精糖工場の所有者が、かつてのプランテーション所有者の古い家族であった。砂糖産業における産業革命はさらに、労働関係の変質を必要とした。プエルトリコでは1873年、キューバでは1880年～1886年に奴隷制は廃止され、古い製糖所が依存していた奴隷システムに決定的な転機を生んだ。

それにもかかわらず、カリブ海域におけるこのような産業革命は、それを補完する農業革命を伴わなかった。それどころか播種、栽培、刈り入れの農業面では、新しい法律制度下にもかかわらず、砂糖産業における奴隷使役の旧習の

基準に基づく伝統的な手法が続けられた。かくして農業の土台と産業面の間に大きな相違が生じた。近代化された精糖工場とは対照的に、農業部門には時代遅れで伝統的な慣習が残存した。この例のように、進んだ耕作技術を使って収穫を改善しないと生じる生産逡減の法則により、サトウキビ生産量はわずかに数年のうちに徐々に減少することになった。

社会的かつ法律上の要因でより悪化したこのような状況に対処する第一の方法は、砂糖の精製＝工業部門と原料の供給、すなわちサトウキビ＝農業部門とを新たに分割することであった。両部門の関係は、19世紀の終わり以降の、間断ない紛争の一つの原因であったであろう。プエルトリコとキューバの古い砂糖寡頭支配層の多くは、工業面を放棄する必要に迫られたが、大部分はサトウキビ農園主の身分、サトウキビ・プランテーションの所有者として残存し、精糖工場の所有者である産業貴族層と常に対立した。

工業化が進行した結果、精糖工場の労働者の生産性はかなり上昇したが、播種と刈り入れの方法は進化しなかったので、農業部門の労働者の生産性は変化しなかった。そのうえ、新規の巨大な装置の能力を活用するために、サトウキビの収量はより増加したが、収穫はより短い期間となり、通常1月に開始し4月に終了した。これはいっばうで重大な問題を生んだ。労働力と新しい高価な機械の最適活用と減価償却との関係である。

労働力については、近代的な産業が必要とするサトウキビの量は、1年間のうちの3～4か月間、何十万人もの刈り入れ農業労働者を同時に雇うことが必要であった。このことはいかなる悲劇的な見方でも言い表せない、1年間の就業期間が4か月という問題を生んだ。大多数の労働者にとり、これは残りの8か月は失業することを意味した。こうしたことは以前には存在

しなかった。なぜなら、いずれにしても年間を通して維持せねばならなかった未熟な奴隷労働と原始的な器具により、日々の搾汁する量は少なく、刈り入れの期間は長く、ほぼ常に仕事があったからである。しかし近代的なプランテーションを最適に機能させるには、理想的には精糖工場の外で、刈り入れ作業のために、最小限の社会福祉で済ませることができて、経済的な理由で安い労働を提供することを余儀なくされた一群の失業中の労働者が必要であった。こうした労働者は、国内のある地点からの移動、あるいは国から国への国外からの大規模な移民を形成した。これらの移民の形が混ざり合ったものが、標準的なものとなった。

近代的な機械を設置したことで生じたもう一つの問題は、必ずしも精糖業だけに限定されるものではないが、巨額の投資を償却するための助けとなる、補完的な収入源を必要としたことであった。特別のサービスとともに、鉄道、発電所、鋳造所などの複数の目的を持つ設備は、自律的な経済の存在と相まって、独立した企業となった。かくして、典型的な精糖工場では、サトウキビを運んだ鉄道は乗客の輸送も担い、発電所は精糖工場に電力を供給しつつ、料金を支払うことができる近隣の定住地や下水道の蓋から公園のベンチに至るまでを製造する鋳造所にも、電力を供給した。精糖工場は地方において経済的、政治的に独占的な影響力を有していたので、非常に高額な料金を請求することができた。1890年代のキューバの典型的な精糖工場では、様々な商品を扱う売店、ホテル、住宅、恒久的あるいは臨時の兵舎、理容店、肉屋、薬局、しばしば売春宿に至るまで管理した。周辺地区への絶対的な支配を強化するために、あるいはそれ自身の経済的利益のために、精糖工場は一般的に私的な通貨を鋳造し、代用通貨となった。かくして、植民地主義と低開発の下でのキューバ、プエルトリコ、サント・ドミンゴで

はイギリスの産業革命の最も典型的な側面の一つが生まれた⁽³⁾。

砂糖代用通貨を使用する方法は、二通りであった。一つは精糖工場が労働者に代用通貨で支払う方法である。この代用通貨は精糖工場周辺の売店や施設で割引されて使用できたが、割引分は給料から差し引かれた。これは自由に使うことのできる法定通貨のようなものであった。もう一つの利用方法は、精糖工場は月給を法定通貨で支払うが、労働者は働き始めた最初の日から、日常使う必需品の支払いをせねばならず、売店主はその店かあるいは付近にある同じグループでしか使えない代用通貨を僅かばかり前貸した。売店主はすぐに、精糖工場の管理部に各労働者に与えた前貸し分を報告し、月末には自動的に給与から差し引かれた。プエルトリコとキューバの精糖工場では、残金は前貸ししていたので、多くの労働者は給料の10パーセントしか現金で受け取れなかったという賃金台帳が存在する⁽⁴⁾。

この時期には十分な関心が払われていない、もう一つの重要な変化があった。最終商品、すなわち新しい方法で生産された砂糖は、製糖所と精糖工場が相違するように、以前の生産物とは大きく異なった。1860年代のどのような市場報告を一瞥しても、砂糖（単数）の価格ではなく、砂糖（複数）の価格となっている。1860年代までは、ハバナ市場は世界の砂糖市場価格の決定に重要な役割を果たした。プエルトリコとハバナの仲買人組合は毎日14種類の砂糖に該当する価格を決めていた。砂糖の取引に適した基準とみなされ、国際的に受け入れられていたスペイン語を話す国々で使用されたオランダ標準は、色により21の異なる段階に区分けされたが、最下位の第1段階は事実上の欠陥品で、最高位の第21段階は粒状の白糖であった。砂糖の格付けの多さは、原始的な機械で生産されたことの必然的な結果であった。この

ような機械はカリブ海域全体の製糖所に設置されたが、砂糖の品質は口頭伝承や長年の経験で培われた、嗅覚、味覚、触覚、聴覚の勘を働かせた、通常は文字の読めない熟練工の円熟した技、奴隷たちが鍋に適当な量の薪をくべる火の強弱、サトウキビから手作業で絞りだした砂糖絞り汁の純度、サトウキビの完熟度などの自然条件に左右された。

これと引き換えに1890年代には、国際的に採用された分析方法に基づく技術により検査され、近代的な品質管理のもとで実施された、砂糖製造の精糖プロセスが標準となった。この管理のおかげで19世紀後半にはカリブ海域のすべての製造所で Pol 95° (Pol はショ糖量) の分蜜糖を生産した。20世紀初頭には純度 Pol 96° が標準となった。産業化以前の段階で精製された様々な種類の砂糖は最低でも、箱、樽、袋の3つの形態の容器を必要とした。ニューヨーク取引で袋が占めたのはわずか4%で、1860年代にはほとんど使用されなかった。1890年には状況は一変した。米国の砂糖輸入の95%は袋を使用した。20世紀の初めには、箱と樽は事実上は博物館の陳列品となった。

一つの種類の砂糖に一つの容器という輸送方法は、砂糖取引の変化に大きな影響を与える要因となった。これまで見てきたように、新しい工業化の時期に、サトウキビあるいは甜菜にかかわらず、キューバ、プエルトリコ、ジャワ、オーストラリア、モーリシャス、ブラジルのいずれかが生産する Pol 96° の砂糖は標準化された生産物で、そのうちのどれかを特定するのは不可能であった。さらに砂糖はとても耐久性があり、袋詰めにすると積み上げて貯蔵するのが容易であった。それと引き換えに1860年代の黒糖は品質が大きく異なり容易に劣化し、輸送に使われた樽は下に置かれた樽が破損しないように、上下に3つずつしか積み上げることができなかった。これ以外にも根本的な相違点があ

った。袋は安価で樽は高価であった。樽は砂糖の重量の10～14%で重かったが、袋は軽くて1%に満たなかった。樽は取り扱いが難しく、輸送費用が非常に高額に上ったが、袋は扱いが容易であった。

こうした要因により新しい取引の慣習が生まれた。それは砂糖の収穫が年度を超えて多量に余ると、それを貯蔵することであった。分蜜糖という新たな種類を袋詰めにする習慣が増加するにつれて、長期にわたり貯蔵することが可能となった。砂糖年度〈10月～翌9月〉の開始時点で、明白に利用可能な期首在庫の存在という新しい問題が生まれた。これは砂糖価格に影響を与える要因となった。それ自体は新しい現象ではなかったが、この分野の商人は常に、価格を決める際に期首在庫を勘案していたことに留意すべきである。変化したのはその規模であった。1860年以前は、期首在庫が推定年間消費量の10%を超えることはめったになかった。1890年代になるとこれは通常30%を超えるものとなり、この傾向は上昇し続けた⁽⁵⁾。

輸入業者が倉庫で保有する砂糖の期首在庫が多ければ多いほど、生産者には価格引き下げの大きな圧力となった。

均一の生産物、袋詰め、世界標準、多量の余剰在庫といった新しい条件は不可避免的に、砂糖取引の革命と称されることとなった。この取引革命は部分的にはこれまで述べてきた要因によるものであるが、19世紀後半の30年余りの、その他の世界経済の変貌が原因ともなった。1860～70年代には、日が刻まれる様々な主要な出来事があった。例えば歴史家は1871年を、より快速で時間に正確でかつ運賃も安かった蒸気船が、風向きに大きく左右される帆船に比べて、輸送量において最初に追い越した年としている。同一の排水量で蒸気船は帆船の5倍の積み荷を運ぶことができた。さらにヨーロッパと東洋を定期的に航海していた帆船は、スエズ運

河の通航から排除されてしまった。一般的に1860年から1880年の間で、アメリカ大陸とヨーロッパを結ぶ航路の船賃は25%安くなった。いっぽうヨーロッパと東洋の植民地、インド、ジャワ、モーリシャス、フィリピンの船賃は63%下落した。この結果、こうした東洋の植民地はその発展を制限していた、周囲に張り巡らされた高額な船賃という壁を壊すことができた。

この時点までは、新しい要因はサトウキビを生産する国だけに影響を与えた。しかし同時進行で19世紀の最後の10年間には、甜菜糖生産が大きく増加した。1860年には甜菜は35万2000トン生産されたが、世界の砂糖生産の20%を占めた。さらに1890年には甜菜糖の生産は370万トンに達し、世界生産の59%を占めた。砂糖の純輸入国であったヨーロッパ大陸は、輸出国に転じていた。その上論理的な帰結として、公正な競争とは程遠いことが起きた。複雑な保護主義のシステム、補助金で補完され、砂糖プレミアムと呼ばれた直接補助金が支給されたために甜菜糖価格は下落し、あらゆる意味で競争の可能性はなくなり、キューバ糖、プエルトリコ糖、ドミニカ糖はヨーロッパ市場から追い出されてしまった。スペイン本国市場を除いて、キューバは1870年にはヨーロッパに約26万トンの砂糖を輸出し、砂糖総輸出量の37%を占めた。1880年にはこの数字は5万トンに減少しほぼ8.54%となり、1890年にはヨーロッパ向けの輸出はわずかに4702トンに減少し、キューバの砂糖総輸出量の0.72%にまで減少したのである。

スペイン語を話す3か国のうち、2か国はまだ植民地であったが、砂糖の唯一の得意先は米国であった。ジャワはオランダの保護主義のおかげで砂糖の生産を増やした。インドとモーリシャスはある程度まで英国の保護政策の恩恵を受けた。同様にボルボンの古い島であるレウニ

オンは、フランスの政策の恩恵を受けた。キューバとプエルトリコそれにフィリピンはいっぽう、保護された市場を有したことはなく、植民地を持つヨーロッパのすべての国のなかで、スペインは一人当たりの砂糖消費量が最も少なく、その上海輸送と商業の発達が不十分で、植民地に砂糖を再輸出することはできなかった。サント・ドミンゴの砂糖もまた、米国をもっぱら顧客とする人々の手中にあった。

砂糖取引の世界では1890年にはすでに、1960年まで継続したのと同じ性質を形成していた。第一に、非常に進歩し保護主義の障壁に守られたヨーロッパの甜菜糖生産者の存在がある。第二には、仏領、英領植民地、オランダ領東インド、ハワイのように、中心部が提供する保護された市場にサトウキビを生産する植民地下の国々である。第三はキューバ、プエルトリコ、フィリピンのような植民地、ブラジル、サント・ドミンゴのような独立した国々で、保護された市場にサトウキビを販売できない国や地域であった。ヨーロッパの砂糖総消費量と域内の甜菜供給量に、植民地からの保護されたサトウキビの量を加えたものとの差が、キューバ、プエルトリコ、サント・ドミンゴ、ブラジルなどがもっぱら競争することになる砂糖価格を決定した。不安定かつ不規則な保護主義の障壁との僅かの残り物の差が、20世紀には自由市場という素晴らしい名前を与えられた。

19世紀末、ヨーロッパの砂糖輸入市場には弾力性の欠落という特徴があった。垣根なしに、先述した自由市場あるいは残り物においてのみ、非常に限られた程度で自由競争あるいは需要と供給の相互作用が存在した。北米市場は、保護主義に守られたものではあるが、国内の生産者が国内需要の最小限しか充足しなかったもので、自由市場を有していた。キューバはその主たる供給者であった。1860年代にはキューバの米国向け砂糖輸出は、米国内の砂糖消費の

60%を占め、この比率は上昇する傾向にあった。残りは主にプエルトリコ、ブラジル、より少ない割合でサント・ドミンゴであった。しかしキューバとプエルトリコは植民地であり、ドミニカ共和国は独立していたが、経済面では植民地とみなされるべきであった。これらは貧しい国々であり、単一の市場に向けられた、輸向きの単一主要生産物に結び付けられていた。経済を自衛する手段を完全に欠いて、当時は一次産品価格を保護する目的により、生産国の共同体を形成する可能性はほとんどなかった⁽⁶⁾。

サトウキビ生産国は事実上は無防備で、砂糖取引はすぐに、強力な国際貿易の利害関係者が地元の商人を排除しつつ、国際的に巨大な企業の単なる仲介役の役割を担わせるものとなった。価格を決定する市場の場所は、それにつれて展開した。例えば1884年には取引価格を決定するのは、ハバナよりもハンブルグの価格がより重要となった。さらに砂糖取引の新しい時代の出現を象徴する画期的な出来事があった。1860年代まで砂糖価格は市場で決まった。市場という言葉の意味は厳密に物理的なものだった。それは地理的な都市の位置をさし、商人が取引し倉庫の置かれた場所を示した。ロンドンではミンシングレーン、ニューヨークではウォール街の下方、ハバナではドレーク・イ・エルマーノス、サマ・イ・シア、アフリア・エルマーノスなどの主な貿易会社の置かれた、仲買人組合付近の港湾地区であった。市場価格という言葉の意味は、その日の最も重要な販売価格の上下の変化のことで、これは即座に直ちに渡す砂糖に支払う最高価格と最低価格のことであった。支払いは通常砂糖を渡されたときに決済した。割り当てられた砂糖を仲介者を通してヨーロッパや米国に売却し輸送する時も、直ちに引き渡すことが慣例であった。

物理的および有形な貿易の世界では、客観的かつ具体的なパラメーターを双方向で使わなけ

ればならず、市場の環境や条件を理論的に分析する代わりに、個別の問題は個人的に解決する必要があった。商人はごく初歩的な算数を使って計算したものだが、砂糖商人像は裕福には見えなかったが、文字が読めなかったのである。同様に奴隷労働を使役する古い製糖所は近代的なものに駆逐されていき、この種の取引業者つまりこの種の商人は、19世紀後半の30年間には、新しい方法を使う新しい企業によって代替されることになった。単純で物理的な現実があった。ニューヨーク、ロンドン、ハンブルグの証券取引所の先物取引市場や、砂糖取引成立の合意署名に介在する複雑な手続の条件には、古い取引組織では対応できなくなっていた。

要言すると、19世紀終末の近代的な砂糖産業は、国際的に厳格な品質規格を満たさねばならない大量の砂糖生産量を有していたので、1860年代以後、独占化傾向のある資本主義の台頭、輸送の高速化、情報にかかわる革新的な技術などの常に新しい現象により複雑化したものとなった。見本品の調査、指数化、経済上の統計の改善などがもたら、商取引への数学の応用、10段階の等級システム、カード化と回収などの方法、穴あきカードなどのデータ利用の進化、電信、電信信号表、電話、大西洋電信ケーブル、テレタイプなどの情報通信の新しい手段、仕事の効率性を評価し、世論を操作する新たな方法であるマーケティングの手法、経済支配を目標にする国際トラストの胎動を助けるために社会学、人類学の研究を利用すること、これらのすべては19世紀の最後の数年間に、砂糖市場での巨大な投機活動に結びついたのである。

この意味において、砂糖取引は国際取引の最先端であった。例えば1861年に設立されたドイツの会社F.O. リヒト (Licht) は、初めて大規模なサンプリングを用いて世界の砂糖生産量を予想し成功した。リヒトの数字は1868年

以降有名な *Monthly Report on Sugar* に掲載されたが、これは砂糖の分野での主な投機家の基本的な武器であった。ロンドンのC. チャルニコウ (Czarnikow) 会社は、カリブ地域に集約しつつ、リヒトに類似した作業を行った。1897年にこの会社はキューバ、プエルトリコ、サント・ドミンゴの砂糖貿易の決め手の役割を演じる支店をニューヨークに開設した。1909年、〈チャルニコウ会社は〉ニューヨーク在住のキューバ人の砂糖仲買人マヌエル・リオнда (Manuel Rionda) と一緒になり、チャルニコウ・リオндаという名称となった。時を経ないで1914年から18年の戦争の間は、キューバの収穫の独占的な仲買人となり、同じ時期にプエルトリコとドミニカのおよそ80%の市場を支配した⁽⁷⁾。この種の会社は同時に市場調査、当該分野の出版物の編集者、仲買人の役割を担った。また、多かれ少なかれ慎重な姿勢ではあったが、いくつかの砂糖権益の強力な代理人として振舞った。例えば、のちにウィレット・アンド・グレイ (Willet & Grey) 会社と呼ばれたウィレット・アンド・ハレン (Willet & Hallen) は、当時世界最大のトラストの一つである米国精糖会社 (American Sugar Refining Co.) の秘密代理人の役割を果たした。

19世紀の後半30年間に、大企業の最新の方法を使いながら、世界の砂糖市場は旧来の商人を排除し、粗糖生産を支配する小さな集団の銀行と精糖企業の手落ちた。ここでは詳細について触れないが、この闘争において、見た目には市場の需要と供給のルールに従うように見せつつも、市場を独占し価格を決定するメカニズムを創出する戦略が決定的に大切であった⁽⁸⁾。

この点については、商品取引所の役割が非常に大事で、植民地産品の新しい時代の幕開けとなった。カリブ海域、なかんずくキューバ、プエルトリコ、サント・ドミンゴにとり、ロンドンの砂糖取引所とのちに有名なニューヨーク・

コーヒー・砂糖取引所となったニューヨーク農産物取引所が特に重要となった。

このような商品取引所の歴史は、少なくとも理論的には古いものである。いくつかの研究では、中世の取引所に源を発するとされる。しかし関連性がどのようなものであろうとも、似ているのは表面上だけである。この商業革命以前、商品取引上は売り手と買い手により構成されていた。それは商取引を実行するための需要と供給の力により構成された種類の市場であった。しかし新しい商品取引所は根本的に異なった。商品は現実には直接売るものではなく、実行された取引は思惑によるものであった。簡単に言うと、取引の中身は決められた日付に一定の量の砂糖を供給することを約束する販売契約書に署名する作業であり、すなわち、先物渡しの日付の価格で販売することであった。受け渡しの日になると、砂糖を渡すのではなく、その日付の実際の引き渡し価格を基準にして、契約書にある価格を再計算して、商品取引所の手数料を差し引いた後で、その差額を双方のうちのどちらかが現金で支払われた。この種の大量の取引が毎日やり取りされたので、取引所は決済方法を提供することとなり、手形交換所の役割をも担った。実際には砂糖が現物として動くのは、取引の1%に満たなかった。かくして商品取引所は、実物の砂糖を売り買いする現物市場に代わるものではなく、価格と条件を押し付けて単に市場を支配するものとなった。1890年代に、ロンドンの著名な出版物である *Economic Journal* は、商品手形交換所 (Produce Clearing House) は、ミンシングレーンにあるモンテカルロのゲーム台のようだと呼んだものであった⁽⁹⁾。

にもかかわらず、すでに述べたように、商品取引所は単に価格を投機の対象とする場というだけでなく、経済的に支配力のあるグループが市場への排他的な支配を強めかつ広める目的で

考案したものでもあった。1897年、砂糖トラストの大スキャンダルを調査した米国上院委員会の公聴会で、米国精糖会社のテオドール・ハベンマイアー (Theodore Havemeyer) 社長は、キューバ、サント・ドミンゴ、プエルトリコの粗糖価格を操作するために、株式市場を使って日常的に政府の役人、商品取引所の職員に賄賂を渡していたと証言した⁽¹⁰⁾。

19世紀の終わりの10年間は予想されたように、商品取引所の活動には規制はなかった。今日では企てることさえ考えられないような取引が毎日行われた。それでも、その時代にはデータ収集とその利用は新しい現象で、異なる商品取引所間の関係に影響するような規則がなかったことを想起すべきである。従って、間違いなく投機家のグループにより規制され、さらに支配されていた国際電信のおかげで、英国と米国東部海岸の5時間の時差を利用して、ニューヨークの取引が開始される前に、ロンドンの取引終了時の価格との差額から、利益を得ることができた。一般的に言って、実質的にはキューバ、プエルトリコ、ドミニカ共和国の唯一の市場である米国は同時に1920年～21年の想像を絶する投機がもとになり、1921年8月24日に論争の種となった市場取引規制法が生まれるまで、砂糖の先物取引を規制する法律は存在しなかった。この法律はすぐに憲法違反とされたが、最終的には1922年9月21日に大した変更もなく再び公布された。

砂糖生産の増加：1860年から1900年頃

19世紀の間キューバの砂糖生産は、1875年までは毎年生産量を増加させた。1880年代には、しばらく前から明らかに危機的な様相を見せていた奴隷制は、決定的な崩壊に向けて衰退が始まった。砂糖産業の急転は、特に1867年から1880年の間を通じて大きな変化を示したが、古い製糖所から近代的な精糖工場の転

換を反映したものであった。にもかかわらず、1895年～1898年の独立戦争により大きく減少した時期を除いて、5期連続して約100万トンを生産し、1890年代にはキューバはすでに世界の主要な砂糖生産国の地位を回復していた。

いっぽうプエルトリコは、奴隷制に基づく生産の不安定性を反映する生産量の上下変動が始まる1850年代までは、経済は上昇傾向を維持した。十分な収穫のあった1873年に、奴隷制を廃止した。にもかかわらず、プエルトリコの奴隷制廃止は近代化への一般的なプロセスを伴わず、1890年代に生産は大きく減少した。様々な要因が、同じ地勢に置かれ、同じ気候を共有し、同じ中心国〈スペイン〉の下にあったことで同様の政府を有した、この二つの植民地が不均衡に発展することに影響を及ぼした。

第一に、二つの島の歴史的な経緯は異なっていた。16世紀から18世紀そして19世紀の最初の20年間にかけて、キューバは生産の中心地であり、商船だけでなく戦艦のための主要な軍港でもあり、スペイン帝国の防衛拠点であった。こうした要因は、ほぼ類のない政治権力を行使する寡頭層の成長を促し、当初から要塞の建設、造船、商業その他から生じる巨額の資本を蓄積した。この資本はその後、砂糖、コーヒー、タバコなどのアグロ・インダストリーに投資された。キューバの寡頭層は、以前は世界の主要な砂糖生産国であったハイチで1791年に起きた革命がもたらせた、対外貿易上の有利な条件を利用することができた。キューバは重要な砂糖産業を所有し、1840年には英領西インド諸島全体を合わせた生産量を上回った。

キューバでは英領、仏領西インド諸島とは異なり、製糖所に投資したのは現地投資家であり、ごくわずかの例外はあったが、不在所有者はいなかった。それどころか、一般的にキューバでは各期の収穫が始まると所有者は各自の製糖所に滞在して、利益を守るために直接監督し運営

した。現代の企業家と同じように、世界の最新の技術進歩に目を見張り、キューバの砂糖産業の利益率と能力を高めるために、最新の技術と機器を遅滞なく取り入れた。

1796年にはすでにこうした現地生まれの企業家たちは、サトウキビ製糖所の蒸気機関採用を試みており、1837年には世界で初めて製糖所から港につながる砂糖と糖蜜を運搬する鉄道を敷設した。事実上ラテンアメリカでこの種の最初の鉄道であった。1842年に、砂糖製造のための真空蒸発釜の使用を開始し、米国と同年の1844年には最初の電信線を敷設した。1849年には遠心分離機を設置した。キューバは植民地下ではあったが、19世紀の間他のラテンアメリカ諸国に先駆けて、技術の面で最先端にあった。立法上の特権的な立場と革新的な起業家という二つの好ましい影響、そして豊かな土壌、理想的な気候、森林資源などのまれにみる恵まれた自然条件により、キューバは1840年から1883年にかけて世界最大の砂糖生産国となったことは理解できよう。このような特質を持たなかったプエルトリコは、ずっと規模の小さな生産者であった。

しかしながら1860年代にキューバとプエルトリコのプランテーションで始まった生産量の減少傾向は、危機の最初の兆候を顕現した。それは奴隷制に基づく労働力の利益の減少と新しい技術を導入することで生じた構造上の困難によるものであった⁽¹¹⁾。

かくして生産者そして役人たちが直面した主要な問題により生じた不安定な時期が始まった。その問題とは、奴隷制から賃労働に転換することを可能にする形態のことであった。生産者たちの目的は、近代的な機械の導入に必要な投資資金を得るために、奴隷にすでに投資してあった資金を補償するような奴隷制廃止の法律をスペインから獲得することであった。生産者たちはまた、安価で自由な労働者すなわち半奴

隷を一定期間保留し、低賃金で1日12～14時間使役させることができて、収穫が終わるとすぐに解雇ができるような、いくつかの法律を公布させたいという希望を持っていた。

1863年にはキューバのサトウキビ農園の所有地の95%が抵当に入っていたのは事実である。この時期の経済調査によると、3億ペソの投資のうち2億ペソが抵当に入っていて、キューバとプエルトリコの3分の2の砂糖産業が、銀行の役割を果たしていた商人の手中にあった⁽¹²⁾。

1860年代のこのような危機的な状況は、一連の好ましい外部環境の変化によりにわかに緩和された。奴隷制に基づくプランテーションはすっかり衰弱したために、内在する構造上の問題を解決するような内なる改革の可能性はもはやなくなり、こうした外部環境の変化は、制度の生命維持装置を延長するだけのものとなった。数年間にわたる米国の南北戦争や普仏戦争は、古典的に生起する不安定な条件を市場にもたらせ、需要を増加させて物価は上昇した。キューバ自身、1868年～1878年の10年間の独立戦争は、最初の大規模な独立のための戦いとなったが、砂糖市場に動揺をもたらせたものの、好ましい市場環境を拡大した。キューバでは10年間の独立戦争の時期と大部分重なったが、ほぼ10年間の生産増と高価格により砂糖生産者はかなりの額にのぼる債務を返済した。一般的にはキューバに劣っていたプエルトリコの同業者は、製糖所の機械化を開始することとなった。とはいえこの時期の傾向は例外的なものであり、時が過ぎると、かつてなかった危機が到来した。

プエルトリコでは、古い様式のサトウキビ・プランテーションの解体は、非常に急速に進んだ。1870年に9万6000トンを生産する550の製糖所があったが、1880年にはそれぞれ5万トン、325に減少した。技術が大変遅れていたもので、生産の危機は品質の危機を伴った。多く

の米国の輸入業者は、精糖業者が拒絶したために、プエルトリコの粗糖輸入を拒否した。しかしプエルトリコの危機には、より重要な一つの事情があった。それは工業化の基盤となるような経済的かつ物理的なインフラストラクチャーがなかったことである。資本投資も、適切な鉄道もなく、さらに生産者側の一致した行動もなかった。たとえそうした努力があったにせよ、ほとんどが個人によるもので、必ずしも適切に設置されなかった機械の購入や、いくらかの精糖工場も作ったが、19世紀末までには良い時期と悪い時期を繰り返しながら、その多くは借金を抱えて終わった。一つ例を挙げると、1873年にカボ・カリベの侯爵であるレオナルド・イガラビデス (Leonardo Igaravidez) により設立されたベガ・バハにあるサン・ビセンテ精糖工場は、数百人の刈り取り農民を使い、製糖所に供給するサトウキビを確保するために、周辺を取り巻く大きなプランテーションを囲い込んでいた。しかし1879年の債務は当時では信じられないような、100万ペソ (1ペソ=1ドル) を超えていた。サン・ビセンテ以外にも、1890年にはラ・ルイサ、ラ・サン・フランシスコ、ラ・コロソ、ラ・カノバナス4つの精糖工場があった。これらの精糖工場は経済的には、20世紀には同じような歴史をたどった。

プエルトリコの砂糖産業の発展を制約したもう一つの要因は、奴隷制から自由労働への転換がうまく運ばなかったことにある。プエルトリコの奴隷制は1873年に廃止されたことになっている。しかしこれは法律上のことである。奴隷制度はそれよりもずっと以前になくなっていて、1870年代にはこの島は、プランテーションの所有者が必要と考える条件を満たすような活動人口を欠いていた。キューバと異なり、プエルトリコは相当の影響のある移民労働力はなかった。中国からわたってきた農業労働者はごくわずかであった。当時は、渡り鳥という一

風変わった名で呼ばれた、スペインからの移民労働者を恒常的に輸入するという試みは失敗に終わった。英領西インド諸島から農業労働者を恒常的に輸入する試みは、ピエケス島のボンセ、ウマカオ、ライサ、カロリナの製糖所に、ごくわずかのグループが居住したにすぎなかった⁽¹³⁾。

キューバは事情が異なった。大規模な砂糖の収穫が起きた地域では、19世紀中ごろには、素晴らしい鉄道網があり港へのアクセスが容易であった。一般的に、鉄道網は当初は砂糖の樽や箱を輸送するためのものであったが、生産地から精糖工場にサトウキビを輸送するのに好都合であることが分かった。生産活動人口に関しては、1847年に中国人農業労働者の大規模な導入が始まり、世紀末にはおそらく15万人に達した。もう一つの労働力の源泉は、いささか異例であった。スペイン本国の常備軍はカルリスタ戦争（スペインの王位継承権をめぐる内乱）で人員が不足していたため、キューバ駐留軍はほとんどが新兵であった。スペインではストライキは完全に法律違反であったものの、キューバの法令では新兵が任期終了まで軍務につくかあるいは精糖工場で農業労働者として働くかのいずれかの選択肢を選ぶことができた。当時キューバでは10年戦争の最中で、多くの新兵がサトウキビの収穫を選んだのはごく自然のことであった。さらに1880年代は新しい精糖工場の所有者達は、1月の初めごろに到着して4月の終わりには出ていく季節移動労働者を効率的に行う環境を作った。これらの労働者は、人口過剰でかなりの失業があり、生活水準が非常に低いカナリア諸島、スペインのガリシアやアストリアス地方からやってきた。

多くのスペイン人の商人、キューバ生まれの古くからの寡頭層に属するいくつかの家族は巨額の資本を持っていたので、特に1880年代以降、精糖工場に投資した。この意味で経済的な面では、独立のための流血の10年戦争は近代

化した砂糖産業には有益であったといえよう。戦争は主として島の極東部で起きたが、100以上の古くてほとんど生産的ではなかったすべての製糖所を破壊した。巨大な新しい製糖所があり、砂糖の80%を生産していた国の西部は、戦禍に見舞われなかった⁽¹⁴⁾。

いっぽうスペイン人の有力な商人たちとキューバの寡頭層が支配していたキューバ島のコロンIAL銀行とスペイン銀行の両行は、スペイン政府から戦費を調達する依頼を受け、結果的に非常な利益を生んだ。キューバとスペインの商船それに鉄道会社は、兵員と武器弾薬の運搬を担った。植民地軍政下であり、戦時中という圧迫感の心理環境のもとで、あらゆる種類の怪しい取引が生まれ、不法に富を得ることが日常的となった。戦争が終わると同時に、このようなグループは、急速に近代化し一新した砂糖産業が必要とする流動資金を所有していたことは明瞭である。

その他の要因もあった。砂糖の取引と、長年の間よく組織され共通した利害と結びついた政治の経験があったために、現地の生産者たちはこの時代が必要としたものをよく知っていて、新しい産業を生むための一連の新しい組織を生み出した。かくして1879年にキューバ島地主協会が誕生した。設立直後から、協会は生産者の活動を指導し、移民労働者を受け入れるためのプロジェクトを立ち上げ、農工業教育の学校を設立、投資を奨励しニューヨークとロンドンの取引所との直通回線を敷設した。またよく読まれた雑誌を発行し、砂糖産業を保護する強力な圧力団体を生んだ。この時期地方の農業労働者や砂糖栽培者にも、同じような団体がたくさん生まれた。

最後に、別の二つの重要な点を指摘する必要がある。一つは、プエルトリコには7年間遅れた1880年に、キューバで奴隷制が廃止されたことである。とはいえ廃止は、持ち主のあらゆる

る気まぐれに任された所有物である大勢の人間が、即座に自由となり市民としての権利と責任を持つことを意味したのではなかった。そうであったならば、廃止は砂糖産業全体の破壊を生んでいたであろう。キューバの奴隷制について、信頼できる最後のデータである1877年によると、砂糖生産の70%以上は奴隷労働によるものであった。現実には奴隷制廃止の法は、奴隷制度の事実上の崩壊で特徴づけられた状況を、単に法律上追認したものに過ぎなかった。

実際のところすでに1860年代には、そして1870年代にはそれ以上に、労働力の搾取の方法として奴隷制の分類には、たくさんの種類があった。まず手始めに、純粋な奴隷があり製糖所で強制的に労働させられた。次に、契約による奴隷 (*contratados*) があった。これは全く異なる条件下に置かれた。体罰は禁じられ、契約上の支払いの一部を受け取った。さらに日雇い (*jornalero*) がおり、これは前述の種類の変化したもので、ある定められた数字の代わりに製糖所に個人的に雇われて、半自由の条件の下で自身の労働を自由に提供する権利を持ち、定期的に名目上の所有者に、給与の一部を支払う奴隷であった。また当時は非常に一般的な特徴であった、給与と奴隷 (*asalariado*) が存在し、だいたい自由人の給与の50~70%の金額を受け取った。あらゆる種類の奴隷の多くは、小さな土地の一区画の用益権を有し、作物を植えたり動物を育てながら、その一部を製糖所に販売していた。このような多くの種類の奴隷制の下で、黒人、自由白人、中国人、事実上の奴隷であるユカタンからの契約農業労働者、またしばしば、政府が製糖所に提供したわずかの給料を受け取る囚人達が働いていた。労働力の提供がこのように変則的なものであったので、資本主義的な工業発展の足かせとなった。奴隷制廃止法は、労働力の錯綜した制度を生産的なものに合理化する手段の一つであった。

こうしたことすべては、次のような結論を生む。本質的には、1880年代からのキューバ糖の生産の変化は、技術的というよりもはるかに社会経済的なものであった。右は機械や生産工程が顕著な改善を見せなかったということの意味するものではない。すでに見てきたように、もちろんそのようなことは起きたのである。ここで確認したいのは、生産工程の完璧な革新には、世紀の半ば頃からキューバの多くの製糖所がしてきたように、近代的な工業機械を設置することだけにあるのではなかったということである。奴隷の所有者達が簡単には実行することができなかったような革新的な変化が、社会的、制度上のレベルにおいて深く刻み込まれていたのである。その中で、最も反動的な人々だけが可能な範囲の期間、自分たちの奴隷を拘束し搾取したのである。彼らは消滅する運命にあった過去の陋習に固執し、自分たちの奴隷は投資した物財の一部と判断し、拘束したのである。おそらく彼らには、これ以外の選択肢はなかったであろう。

述べねばならないもう一つの重要な事実は、キューバの集中強化のプロセスである。これまで見たように、工業化が進むにつれて非効率な生産単位はすぐに消えていった。キューバの主力砂糖生産地であるマタンサでは、1877年に517の製糖所があり生産量は35万トンに達した。1895年には残存した製糖所は99に減少したが、生産量はおよそ倍の60万トンとなった⁽¹⁵⁾。

19世紀後半の数十年間、製糖所は数の上では少なくなり、より大規模な製糖所へと生産集中が起きたが、土地の所有制度には同規模では起きなかった。おそらく大土地所有者の課す負担やその他の義務、特に土地と不可分で切り離されない地代により、工業化を補完するような土地集中の企図に抗するような動きを生んだのであろう。その結果農業と工業に明確な格差が生まれた。これは工業と科学技術が前進した時

期に、サトウキビ・プランテーションが遅れをとったことの一つの説明である。

土地であろうが製糖所であろうが、直接所有の観点では19世紀のキューバ糖産業における米国資本の存在を示す兆候はほとんどない。確かにフランス人やカナダ人、ドイツ人と同じように北米人が所有していた製糖所は存在した。1898年に島を占領した米国軍の数字によると、当時93.5%の製糖所はキューバ人とスペイン人の所有で、6.5%だけが外国人のものであったが、この中にはもちろん米国市民も含まれていた。そのうえ、北米人所有として掲載されている製糖所のリストの多くは実際のところ、キューバ人とスペイン人が所有していたもので、直前に北米人が購入したものであった。

ここまで主に19世紀の最後の数十年間にキューバの砂糖産業の生産に、内部要因が与えた影響について説明してきた。しかしこの過程において、重要な外部要因も介在した。したがって、米国がキューバの砂糖産業に限定的にしか関わりがなかったというのは、製糖所の所有についてだけを意味した。国際貿易の観点では、米国はかなり以前から覇権を握っていた。競争の黄金期であったとされる1870年代にすでに、少なくとも砂糖に関して、米国では寡占市場の構造が存在した。砂糖トラストは1887年8月に法的な根拠を持ったが、これは米国精糖会社が設立されたのと時を同じくし、10月には北米の都市にある21の精糖会社がトラストに参加することに合意した。実際には、トラストはその10年前に誕生していた⁽¹⁶⁾。

1871年の砂糖条例は、キューバ、プエルトリコ、サント・ドミンゴを経済的に支配するための目的で、東海岸の精糖業者が圧力をかけて米国で作成された初めての新植民地主義的な法律に基づく手段であった。1880年代の10年間、この3つの島はほぼすべての砂糖を米国に輸出し、市場では唯一米国精糖会社とだけ取引し、

砂糖は北米の船で運ばれ、価格を決定したのはニューヨーク商品取引所であり、島の生産者と製糖所の所有者はその価格とウィレット・グレイ社が計算した量、AP通信がウエスタン・ユニオン（Western Union）に伝えた情報に従っていた。製糖所にも土地にも直接投資することなく、3つの島が米国に併合される事態が進行していた。そしてその数年後に、武力による併合の動きが起きた。

1895年、キューバ糖の発展はにわかに遮られた。刈り入れの最中であつた2月24日、新たな独立戦争が勃発した。この戦争は10年戦争と異なり、島全体を巻き込んだ。戦闘の規模は、いくつかの数字から読み取れる。スペインは40万人の兵士を送り込んだ。これは大西洋を渡った兵士の数としては、第二次世界大戦まで最大のものであった。この数字はキューバの住民3人に対してスペイン軍の兵1人の割合であつた。1895年から1898年までの独立戦争の間に、サトウキビは簡単に燃焼するので、数十万ヘクタールのサトウキビ畑が繰り返し焼き尽くされた。また無数の多くの製糖所が破壊された。残念ながら、この戦争が砂糖産業にもたらした損害の正確な数字は欠如している。

砂糖の実力者の利害に影響されたキューバの正統派の歴史認識は、戦時中に砂糖産業は完全に破壊されたという神話を生んだ。戦時中にプランテーションの統計を実施しなかったのも、壊滅したという主張は現代の多くの歴史家をも支配する考えである。しかし、散逸した何千もの資料を調査した詳細な定性的な研究によると、サトウキビの大幅な生産量減少は確かではあるが、それに引き換え、工業部門の被害はずっと少ないものであった。1895年、50の大規模な精糖工場のうち、戦時中に破壊されたのはわずかに7で、4つがある程度の被害を受け、39はすぐに搾汁する準備が整っていた。おそらく糖業が受けた実質的な被害の総計は最大で

も、設置された生産能力の20～25%であったであろう。改めて工業を前進させるためには、広い範囲でサトウキビの播種を計画する必要があった。というのは戦争はより多くの地域で、従来のルールを完全に変えていて、農業労働者は拡散して居住していたからである。これは戦時中と戦後の最初の数年間の生産量の減少を説明している。さらに戦闘が終了した3年後には、なぜ1895年の全生産量と同じ、100万トンに生産量が達したのかも説明している。

19世紀後半にサント・ドミンゴの糖業はキューバの10年戦争により、多くのキューバ東部の製糖所の所有者、キューバの零細な資本家が移住してきたため大きな影響を受けた。サント・ドミンゴは彼らの亡命を受け入れた。言語が共通で物理的にも社会的にもキューバに似ており、政治的には比較的安定し、外国からのアグロ・インダストリー取引への投資を保護し奨励した。投資家に向けられた便宜の中でも、製糖所建設のために政府所有地を譲許したことを含め、輸出入税の免除を挙げることができる。気候、土地の肥沃さ、降雨量などの自然環境は、砂糖のアグロ・インダストリーの発展に、キューバと同じように好適であった。

このような条件のもとで、異なる国籍もあったが、主にキューバ人の手による砂糖産業の近代化の最初の段階がスタートした。一般的にはわずかな金額ではあったが初期の資本投資はこうした商人の手により個人的になされるか、あるいはドミニカ人の代理人に託すか、あるいはその両方を同時に行った。投資はその後、現地の商人や金貸し、あるいは外国の機械製造業者が保証の手段として、萌芽的な産業を担保に取りながら融資した。土地は非常に安価で、政府の当初の土地の譲許面積は売却、賃貸などを通してまもなく拡大した。技術上の見地では、現地の製糖所に比べれば革新的ではあったが、キューバの東部の標準的な製糖所と比べると、最

新式の機械は備わっていなかった。このような会社は明らかに政府の支援と1870年代の砂糖市場の例外的な高値がなければ繁栄するものではなかった。サント・ドミンゴには1882年に、すでに21の製糖所があったが、当初の幸運が一旦過ぎ去ると、そのすべては危機に直面した。1884年に記録が残るうちで砂糖価格が最も値下がりしたとき、地元の企業家の多くは排除され、所有地の集中が進んだ。1884年以降には、たった一人の投資家が、10以上の製糖所を支配できた。1884年から1900年の間に、一時的あるいは恒久的に、約14の製糖所が破産あるいは閉鎖された。

不況のもう一つの結果は、生産費をより安くするために、近代的な技術を受け入れることを加速させ、そのためにサント・ドミンゴの砂糖産業の風景は、キューバモデルに似た精糖工場の出現となったが、これは前述したのと同じような問題を生んだ。精糖工場はより広いサトウキビ耕作地とより素早い供給を必要としたのである。鉄道は大土地所有に対応する構造上の条件を提供し、キューバと同様に、産業の集中は土地の集中よりもずっと急速であった。新しいそしてより規模の大きな精糖工場は、独立したサトウキビ刈り入れ農民である、コロナト(colonato)と呼ばれる就労形態を設けることを余儀なくした。この結果農業と工業とが分離した。19世紀にサント・ドミンゴの最大の精糖工場はサンペドロ・デ・マコリスにあったキューバ人組織パドロ(Padró)のソラウン会社が創設したコンスエロ精糖工場であった。1880年代には新しい構成員である米国人のウィリアム・L・バス(William L. Bass)指導の下で、当時の新聞が評したように、砂糖工場を小さな共和国に変えたが、それはその地方の社会経済を支配する巨大な経済組織の性格を獲得していたことを意味した。

19世紀のサント・ドミンゴの砂糖産業はキ

キューバとも、あるいはプエルトリコと比べて、とても小さなものであった。1880年の危機的な時期に、全生産量は年間2万トンを超えることはけっしてなかった。にもかかわらず、1895年にキューバで独立戦争が勃発すると、季節的な砂糖の不足が生まれて、それにより砂糖の世界価格が上昇した。ドミニカの製糖所は生産量を増やしたが、据付生産設備の能力では5万トン以上の生産はできなかった。キューバは戦争中でも25万トン以上を生産した。

砂糖生産の増加：1900～1930年頃

1900年には、キューバ、プエルトリコ、ドミニカ共和国を合わせた砂糖生産量は43万トンで、世界全体の生産量のほぼ4%であった。その後20年間、年率でキューバの砂糖産業は14.2%、プエルトリコ14.3%、ドミニカは8.2%増加した。その結果1920年にはこの3か国は合計453万3119トン生産し、1920年の数字は、第一次世界大戦の影響でヨーロッパの砂糖産業が打撃を受けたことを認める必要はあるが、世界全体の生産量の29.3%を占めるに至った。3つの事例において例外なく、生産増加のプロセスには共通した特徴があった。それは米国の軍事介入により刺激されたものであった。米国の軍隊は1898年、キューバとプエルトリコを占領した。その後プエルトリコは米国に併合された。米国のキューバ軍事侵攻は1902年まで続き、その後1906年から1908年に再び軍事介入が起きた。ドミニカ共和国は異なるプロセスをたどった。1844年から名目上は独立していたが、この国が動揺していたことで、1905年には米国に関税の徴収と監督を認める協定を締結することとなった。1915年、米国に不利益になる政権が発足する可能性が生じたため米国は介入し、1924年まで軍事的に占領した。

3つの事例のいずれにおいても、糖業に関心

のある北米の法人企業は、占領軍から物的な便宜と有利な投資に必要な法的枠組みを手に入れた。1900年の最初の10年間には、設立趣意書と広告にみられるように、北米の砂糖企業の算段は、単純な前提に基づいていた。第一に、米国では例外的に絶対的に人口が増加し、一人当たりの消費量も相対的に増加しているので、砂糖市場は継続した拡大を見込めること。第二に、軍事的占領あるいは介入それ自体が、自由に操れる併合下に置くこととなり、国内の法律上の枠組みと米国の投資に有利な政治社会上の条件を永続化することを保証していること。第三に、外部的にはこれらの国と米国との関係は、それぞれが類似したもので、市場の条件は安定していた。第四に、雨量、気温、土壌、その他の自然条件は、これら3か国は砂糖生産に理想的で、同時に地理的に大陸に近接していたので有利であり、3か国はまた中米・カリブ海域における、米国の権益の基軸でもあった。第五に、このような条件の下での、砂糖への投資は世界中を照らしてみても、最も安全であり利益の上がるものであった。第六に、たとえ長期であっても、このように恵まれた条件は変化しないものであると予想されたことである。

米国が優れた独自の糖業技術を有していた上に、サトウキビの生産と輸送のために必要なあらゆる機械を製造する能力をもつ工場をもっていたことを忘れてはならない。それ以上に好都合だったのは、産業設備一式は米国人のみによるか、あるいは技術的にも文化的にも彼らのために訓練された人員も加わり、海上輸送されたのちに組み立てられ、稼働・運転し管理されたことである。

上述のような投資のアキレス腱は、サトウキビそれ自身であった。サトウキビはこれらの島の住民あるいは近隣の島から農業労働者として輸入された労働力により、播種、栽培、収穫されねばならなかった。巨大な機械とその据付工

事、大規模な建造物群、輸送、労働力、電話、電信、修理工場などは、長期にわたって償還される巨額の投資を想定していた。投資の収益性は、必要な時期に定められた価格の量と質のサトウキビを搬入し、それを完璧な精度で間断なく供給し続けることに依存した。このことに関しては、サトウキビは甜菜よりもはるかにデリケートなものである。甜菜は製糖処理のために事前に収穫し貯蔵することができるが、サトウキビは決められた量を正確に収穫し、24時間以内には搾汁しなくてはならない。貯蔵できないのである。

様々なこうした理由により、砂糖産業の農業面は、これまで見たように基本的には手作業のため、1920年代にはキューバだけで30万人に及ぶ労働者が参加したが、正確さとペースで工業面に適応せねばならなかった。さらに物事を複雑にしたのは、平均4か月間のサトウキビの収穫期が終わると、農業労働者の半数以上は即座に解雇されたことである。残存した労働者の解雇は段階的に行われたが、年間を通して雇用されたのは労働者の10%に留まった。

以上のようなことすべてが原因となり、近代的な砂糖産業は二つの基本的な問題に直面した。それはサトウキビの供給が安定することと各収穫期に十分な労働者のいることである。労働力については後述する。サトウキビの生産についてはキューバとプエルトリコは三つの異なる段階に分けて述べることができるが、ドミニカ共和国はこれに当てはまらない。1880年代まで続いた奴隷制に基づく初期のシステムに呼応する第一段階においては、製糖所は基本的に農業企業であった。株式あるいは資本の主要な構成要素は、土地と奴隷（農業労働者）だったからである。このような企業では、奴隷を一年中維持せねばならず、死の季節〈刈り入れが終わった時期〉の間に播種・栽培させながら年中働かせねばならなかった。この結果、製糖所の

所有者は搾汁するだけのサトウキビの量を栽培した。

第二段階では、転換期となる奴隷制廃止ののち、工業と農業に独立した二部門に分割された。この段階は労働分業と呼ばれるが、旧来の奴隷が働いた古い製糖所のあるサトウキビの栽培地区に、巨大な精糖工場が発展した時期に呼応する。この時期の発展段階の特徴は、所有地で生産したサトウキビでは不十分だったので、精糖工場は周りにある農場や農園からもサトウキビを購入したことである。新しい精糖工場が外部のサトウキビ生産者から一定の量の購入を開始したことは、カリブ海域のスペイン語圏諸国の近・現代史にとり、非常に重要な社会経済の階層が出現したことを意味した。右のサトウキビ生産者はサトウキビ農場主と呼ばれたが、一般的な物差しでは、製糖所の所有者かその相続者であった。彼らはある程度の教養、政治経験、階級ではないが集団としての自己認識を持っていた。1880年代にはすでに共通の利害を擁護するため連合体を組織し始めた。砂糖産業における農業と工業の経済上の分業はすでに既成事実で、部門間に明らかな利害対立を生んだ。さらに19世紀末から20世紀の初頭にかけては少なくとも、サトウキビ農場主達が砂糖産業を牛耳っていた。

米国資本がカリブ海域の糖業に入り込もうとしたときに、大規模な投資会社が遭遇したのは、上のような状況であった。このような大資本の株式会社が、愛国主義的な政治傾向を持つ地元の組織化されたグループにより、サトウキビの供給を統制する危険を回避しようとしたことは、当然のことであろう。従って合理的な判断として、キューバとドミニカ共和国の例では、自分たちの手でサトウキビを直接あるいはたとえ間接的であっても、自分たちが選んだ中間業者を通して生産し、より住民が少なく土地が安価な場所に新しい設備を設置した。プエルトリ

コは8986平方キロの面積をもつとても小さな島で、19世紀には奴隷が働いていた大規模な砂糖産業が存在していたので、サトウキビ生産に適した未開墾地はなかった。従って状況は異なり、新規の会社に対しては経済統制のもとで、収穫したサトウキビの販売を、サトウキビ生産者に義務付けることを開始した。同じように重要な配慮が、別にもあった。米国はいくつかの農産品の生産にかなりの機械化を達成していた。従って新規の投資家たちが、規模の経済の追加的な利益を得ることを目的として、生産活動人口の少ないキューバ東部で、サトウキビ生産も同様に機械化しようとしたのも自明のことであった。しかし農業の大規模な機械化はそれに適した土地の面積の集中を生み、したがって、砂糖の大土地所有制を生んだ。これは経済の現実的な帰結であり、当時の政治小説が表現したような、土地への単なる渴望ではなかった。最後に、農業の機械化が起きなかった理由の一つは、キューバとドミニカ共和国の文化、機械設備の利用度、土壌の知識、必要なサトウキビ品種などのインフラストラクチャーの水準が機械化には不十分であったことがある。さらにもう一つの理由として、サトウキビの刈り入れ、栽培、播種に適した機械の水準が低かったことがある。

キューバには第三の解決策があった。それは米国の砂糖会社にとり経済的には満足できるものであったが、キューバにとっては政治社会的には壊滅的な結果をもたらせた。すなわち大規模農業である。20世紀におけるもっとも偉大なサトウキビ研究者の一人である英国人のノエル・デア（Noël Deerr）は、第一次世界大戦以前にキューバを訪問し、キューバのより大規模でより経済的なサトウキビ生産者は、サトウキビを生産するすべての国のなかで、より劣った栽培をしているという、明らかに矛盾する事象の背景にある理由をすぐに理解した⁽¹⁷⁾。

経済科学の示すところでは、土地がふんだんにあり労働力が不足しているところでは、土地の利用度をより高めることになる〈外延的拡大〉。この論法によると、確かに土地からの収益は低い、高い収益を得るためには、土地面積を広くするほうが、コストの高い労働力をより多く使用するよりも、サトウキビの生産コストを安くすることができる。

上の理由により、カマグエイとオリエンテ地域においてサトウキビ大土地所有制は、キューバの国土面積が11万1000平方キロであることを考慮すると、とんでもなく広い耕作地を所有することになった。例えば1900年、カマグエイの地元の古い家族が所有する二つの製糖所は4000ヘクタールの土地で合計2万1700トンのサトウキビを生産した。1925年には26の精糖工場があり、全部を外国人が所有し、二つの古い製糖所だけがキューバ人の手に置かれていた。この26の新規の精糖工場はおよそ100万ヘクタールの土地を所有あるいは運営したが、同年に140万2175トンの生産量があった。オリエンテにおいては同様に、今世紀最初の30年間に建設されたキューバ・米国会社が所有するチャパラ、ラ・デリシアス、ラ・メルセディータの3つの新しい精糖工場はそれぞれ約18万トン生産した。

プエルトリコにおいて米国の植民地政府が公布した1900年5月1日の共同決議により、継続して農業に従事するあらゆる株式会社は法令により、土地の所有あるいは支配は500エーカー（202ヘクタール）を超えないこととされた。この法令は様々な解釈がなされたが、一つだけ確かなことがあった。それは公布された時点ですでに死語だったということである⁽¹⁸⁾。

現実には、砂糖企業の支配する土地集中のプロセスは、プエルトリコのほうがキューバよりも早かった。1899年、サトウキビ生産にあてられた土地面積は2万9197ヘクタールで、

1909年には5万8857ヘクタールに増えていた。さらに1919年には9万2197ヘクタールに達していた。1919年、プエルトリコは消費する農産品の60%を輸入していた。農民のプロレタリアート化、小規模農業が農業労働者に転換することはすでに完遂され、家族主義的な農園のシステムは消滅していた。

1915年以降、砂糖大土地所有制に対する不満がより強くなった。おそらくこのこともあり、500エーカーの法令と呼ばれたものは、1917年の基本法の規定に盛り込まれることとなったが、島の立法部はこの土地面積の制限を履行するようないかなる法律も公布しなかった。しかし法は存在したので、砂糖会社は法が適用される場合に対処して、防衛するための措置を講じた。例えば1917年、セントラル・アグレ砂糖会社はすべての所有地を売却し、経営していた5559ヘクタールの所有地と3211ヘクタールの賃貸地からのサトウキビ生産物のすべての権利を、ルセ会社に譲渡した。同年、サウス・プエルトリコ砂糖会社は同様にルセル会社に譲渡した。ルセとルセルは二つの砂糖会社の子会社であったことは言うまでもない。1936年、プエルトリコで経営していた米国の重要な4つの砂糖会社は2万9646ヘクタールを所有し、2万902ヘクタールを管理し、合計5万584ヘクタールを運営していた。これはプエルトリコの肥沃な土壌の土地面積の10%以上に相当した⁽¹⁹⁾。

ドミニカ共和国における砂糖生産はゆっくりとしたものであったが、1900年5万3000トンから1915年12万6058トンへと間断なく継続した。この国で最大の砂糖精糖工場であるラ・ロマナは1911年に設立され、バルトラムの利害関係者が買収したラ・コンスエロ、ラ・サンタフェ、ラ・キスケイン、ラ・イシドロ、さらにバルトラムは1916年には株式会社となった。この時期には、バラオナ、ラス・パハス、ボカ・チカの精糖工場が設立された。北米の砂

糖企業による土地買収の歴史は、不正、強要、その他の不法行為の告発に満ちている。1900年の土地登記法の適用は、ドミニカ共和国の近代史における最初の土地測量であったが、家族が何年も前からそこに住んでいる土地の所有権を持たない、多くの小規模農民の困窮化を生んだ。精糖工場が新規に建設され既存の製糖所を拡張したので、占領期の生産量は1916年の12万8000トンから1924年には23万3000トンと、2倍に増加した。同時期に砂糖会社の所有する土地面積は、1916年5万6420ヘクタールから1924年には3倍の15万9913となった。米国企業の投資と支配のプロセスは以下のデータで読み取ることができる。1900年にドミニカ共和国には14の製糖所があったが、いずれも米国の巨大な株式会社には属さなかった。米国の占領が終わったとき、22の精糖工場があったが、そのうち12は米国人の所有であった。より象徴的なことは、12の精糖工場は砂糖生産の81%を占め、砂糖産業資本の82%を有していたという事実であろう。さらにそのうちの3社、ラ・ロマナ、ラ・コンスエロ、ラ・バラオナだけでドミニカの砂糖生産のほぼ50%を占めていた。

生産量535万585トンに達したキューバの巨大な砂糖産業は1929年、突然立ち止まった。3年後には61%減少し、生産量は207万3055トンとなった。キューバで最後に建設された精糖工場は、1929年のカマグエイにあるサンタ・マルタであった。その所有者と管理者はマリオ・ガルシア・メノカル (Mario García Menocal) 将軍で、1912年～1920年までキューバの大統領職にあり、同時に長年にわたり北米企業であるキューバ・米国砂糖会社の総支配人でもあった。キューバで新たに精糖工場の建設が始まるのは、その50年後のことである。

20世紀の間キューバの糖業への投資は、唯一の主要市場である米国市場にのみ目を向け

た。しかし米国領のプエルトリコ、フィリピン、ハワイ、ドミニカ共和国に資金を投下していた投資家たちも同じように、米国市場に目を向けていた。1930年代の大恐慌は、市場の実需のほぼ倍の生産能力を持っていた一つの産業が、どれほど制御できない経済となるのかを説明した。

かくして、キューバ糖は北米市場以外には市場を見つけることができなかった。というのはヨーロッパの甜菜産業は第一次世界大戦の被害から回復していて、より強固な保護主義の障壁を築いていたからである。ジャワ、オーストラリア、インドその他の砂糖生産地もまた、搾汁能力を増加させていた。

キューバ政府は初めて、砂糖の世界市場を規制する合意に署名するための具体的な措置を講じた。しかし国際社会での政治的な影響力はなく、結局1930年のチャドボーン (Chadbourne) 計画と呼ばれるものに署名することになった。これにより砂糖に権益を有し、キューバ、プエルトリコ、サント・ドミンゴ、フィリピン、ハワイ、米国本土に精糖工場を所有する様々な米国企業が、それぞれの生産量を調整しながら、北米市場を規制できたことは疑いない。しかし世界市場には全く効果はなかった。1933年～1934年にまさに、キューバの砂糖生産量は最少となったが、米国領のプエルトリコ、フィリピン、ハワイはそれぞれ100万トン以上の生産量となり、史上最大の収穫量であった。ドミニカ共和国はチャドボーン計画による減産の影響を受けなかった。というのは砂糖生産はもっぱら北米人の手に置かれていたが、米国の国内市場には向けられていなかったからである。1912年、ドミニカ産の砂糖のほぼ半分は英国市場に輸出され、残りの大部分はカナダに向けられていた。米国が占領したことで事情が変化していた。1920年、ドミニカの実産量の70%は北米市場に輸出されていた。しかし同年に米

国の新しい関税が発効すると政策が変更され、1925年にはドミニカ産糖はわずかに2%しか米国に輸出されなかった。残りの98%はカナダ、オランダ、フランス、そしてなかなづく1960年まで主要な顧客であった英国に輸出された。

恐慌により、砂糖は40年前から提供していた、豊富な利益の源泉であることをやめた。王様の砂糖は、王様ではなくなった。そこで北米資本はより利益の大きかった別の方面に向けて移動した。キューバは世界最大の生産者であったために、自然の成り行きとして最も影響を受けた。北米の会社は、キューバの利害関係者に精糖工場と土地の売却を開始した。このプロセスを、ある人々はゆっくりとした砂糖のキューバ化と考えて理想化もしたが、これは単に現地の手にゆだねながら、次第に利益の減少した会社を手放したと考えるべきであろう。しかしながら、賃金引上げ、8時間労働、資本参加などを含む一連の要求を掲げ、北米資本の手にある主要な精糖工場を暴力的に占拠するほどの、強力で結束した労働運動のような、しばしばキューバの攻撃的なナショナリズムという決定的な要因があったことも事実である。

砂糖と労働力

プランテーションの発展については、いくつかの規則性を見出すことは可能である。第一に、土地-労働力係数から明らかなように、大農園主が切望する大量の安価で従順な労働力を使えないという不満がある。ロンドンで発行された1714年のパンフレットによれば、植民地に黒人が供給されないと、砂糖を生産することはできなくなり、黒人の数が多ければ多いほど、そして安ければ安いほど、生産する砂糖の価格は安くなるだろう⁽²⁰⁾。これが18世紀の大農園主の考え方であり、また20世紀の考え方でもあった。キューバ、サント・ドミンゴ、プエル

トリコの現代的なプランテーションが必要とする労働力の必要条件には、当然ながら特定の性格があった。19世紀の間、定められたサトウキビの量から搾汁できる糖分量から生じる砂糖の収益性は、1800年の約2.5%から1900年には10%に増加した。いっぽう同期間に砂糖産業の労働者の生産性は、最新の機械を設置し進んだ生産技術を導入することで、少なくとも1500%増加した。しかし1900年中ごろのサトウキビ刈り入れ農民は、1800年の先人たちと同じような農具と方法を使っていたので生産性は低かった。サトウキビの播種、栽培、刈り入れをする農業部門と、砂糖を精製する工業部門の間には技術的に大きな溝があった。

さて厳密な意味では、工業部門は砂糖を生産するのではなく、サトウキビに含有されている糖分を搾汁するプロセスである。一つのサトウキビの株に含有される総サッカロース（ショ糖量）には限度があり、その量を上回る量を搾汁することはできないことは明らかである。工業部門が収益性の限度に近づくにつれて、サトウキビの費用は特別な技能を有さない手作業の労働力コストに密接に関係することを反映したので、進歩の遅い農業部門が負担する生産コストに占める比率は増大した。大農園主は少なくとも短期には農業革命を起こすことはできなかった。総生産コストに対するサトウキビ費用の上昇という問題の解決策は、農業労働者、特に刈り入れ農民の賃金を絶対的に低く抑えることであった。

このような状況を考慮すると、近代のサトウキビ大農園主の日頃の不満は、労働力が不足していたことと理解できよう。一般的には、絶対的な労働力不足ではなく、季節的な不足であった。これは次のように定義できよう。せいぜい3～4か月間のサトウキビ刈り入れが終わったとたんに、精糖工場周辺に放置される運命にある、そのようなサトウキビ生産地に強制移動で

きるだけの、相当量の失業中の労働者が不足していたということである。生存水準ぎりぎり、貧しい食事、粗末な小屋のハンモック、多くの場合賃金は法定通貨ではなく、精糖工場の売店や食料品店でしか使えない代用通貨で支払われていた。

キューバでは独立戦争直後の米国の占領下にあった1899年～1902年の間に、砂糖の利害関係者と鉱物会社は占領軍政府に対して繰り返し、農業労働者の輸入許可を求めている。これはまさに多数の失業中の労働者が、島の都市と農村で徘徊しているときであった。このことは砂糖産業と鉱業において、悲惨な労働環境にあったことを物語る明白に矛盾した状況であった。不安定な状況にもかかわらず、失業中の現地住民は依然として劣悪な労働条件下にあった鉱山やサトウキビ農場での労働を、きっぱりと拒否したのである。

キューバの労働市場は当時、特別に複雑な状況が生んだ経済以外の要因により、不均衡な状態に置かれていた。少なくとも兵の大部分が、黒人あるいはムラート〈黒人と白人の混血〉であった独立軍のベテラン達は、国内の社会経済上の生活で存在感を増し始めた。彼らは抑圧され、労働者としてかつ黒人であるという二重の意味で搾取されるセクターを代表した。同時にこれまで見たように、砂糖とその貿易の富は、主に白人であるスペイン人の手に戻り始めた。かくして、キューバの三つの基本的な社会経済構造上における闘争が生まれた。階級（雇用者と労働者）、社会（白人と黒人）、国籍（スペインとキューバ）である。外国軍の占領下にあり、かつ武器を捨てることを拒んだ自国軍の存在は、しばしば不吉な兆候を生んだ。

労働者の輸入を許可するようにとの執拗な要請は、当時優勢であったスペイン人の利害よりも、もっぱらキューバでの活動を活発にしていた北米の砂糖会社、鉱業会社から出された。そ

のためこのような要請は、西インド諸島の黒人奴隷の輸入を禁じていた北米の占領軍当局と対立した。この政策に基づいて、占領当局とそれに依存していた後の歴代共和国政府は、スペイン人の移民を促すことに多大の関心を持った。黒人の流入を禁じるのと同時に、敗北したスペイン軍の兵に、キューバに留まる機会を提示することさえしたが、スペイン人の移民受け入れを進めるという相反する政策には、三つの政治社会的な性質を持つ目的があった。第一は、人口に占める中で、黒人を安価で従順な労働力の供給源に留めることで、増大する黒人の影響力を弱めながら、島を白人化すること。第二は、植民地の呪縛が解き放たれた後に、宗主国であったまさにその国の市民を大量に受け入れることで、キューバをスペインの植民地から解放すること。第三は、島にいるスペイン人資本家の支持を取り付けることにあった。彼らは独立戦争の被害を受けなかったし、この時期には熱心な米国併合支持者であった。時が経つにつれて、人種上かつ経済的な利害対立は深まり、愛国主義的な感情は高揚し、併合は実現しなかった。米国が契約による西インド、黒人、中国人の農業労働者などの導入に反対したのは、法律上の理由があった。1880年以後、このような労働者が米国に入国することは法により禁じられ、米国軍により占領されていた当時のキューバでも、同様に施行された。右のような困難な問題にもかかわらず、1899年から1902年に及ぶ4年間の米国占領期に行われた4回のいずれの収穫期にも、何千ヘクタールの土地のサトウキビの収穫には、十分な労働者を確保できた。順調な回復プロセスは非常に良好な結果を生み、1902年に89万7000トンを生産したジャワに次いで、キューバは87万6000トンを生産し、世界第二位のサトウキビ生産国となった。

キューバ砂糖産業の生産量は1900年から1925年までに、30万トンから450万トンに達

し、年間平均増加率12%の顕著な成長を見せたが、これは島の人口稠密地域である西部から東部の人口過疎のオリエンテ北部、カマグエイに精糖産業が地理的に移動したと互いに密接に関係している。新規の精糖工場の建設には、巨額な資本だけでなく、機械を据え付け、精糖工場を建築するための数千人の雇用を必要とした。これまで見てきたようにこの任務には、政府の支援したスペイン人の移民が重要な役割を果たした。1902年から1911年の間に、キューバには32万2878人の移民があったが、そのうち77.26%はスペイン人であった。同時にサトウキビの刈り入れ農民の数は、1900年の3万人から1925年には31万5000人に増加した。スタートしたばかりのカマグエイ、オリエンテのサトウキビ農場は安価で働く労働力を必要とし、米国占領下の差別的な政策を止めさせることに勝利し、キューバは西インド諸島からの移民に門戸を開いたのである。

合法かつ規則的な契約労働者の輸入は、1913年にニペ・ベイ会社に、ジャマイカからの1000人の農業労働者の移入を譲許したことから開始したようである。この日付以前にも、キューバには5000人のグループが入国していたが、ジャマイカの出国記録には掲載されているものの、キューバの入国記録には記載がない。1913年から1929年の間に、約28万人のハイチ人とジャマイカ人が入国した。季節的な移民であったため、刈り入れが終了すると彼らの多くは帰国した。しかしかなりの数は、サトウキビの播種と栽培で働き、後には9月から11月のコーヒー、1月から5月のサトウキビの収穫期の端境期を乗り越えながら、キューバに留まった。帰国せずにキューバに残った者の大多数は不法滞在であった。この非合法性が、彼らを搾取しやすくさせた。西インドからの労働者、特にハイチ人は、地方でひしめき合って暮らし、極めて悲惨な光景を見せた。1933年の調査で

は、7万9838人のハイチ人、4万471人のジャマイカ人がキューバに居住するとしている。しかしキューバの移民局はこの数字の信ぴょう性を疑い、両方の国民を合わせて15万人が居住していると推計している。結果的に、サトウキビ・プランテーションは、特に刈り入れについては、十分すぎるほどの安価な労働力を有していたのである。

1929年のサトウキビの刈り入れは1926年と同様、31万5000人の人手を要したが、1933年には恐慌の発生により、残念ながら失業と半失業のデータはないが、おそらく10万人以下しか要さなかったであろう。当時の写真は、サトウキビ耕作地での数日間の仕事をもらうために、精糖工場の前に並ぶ失業者の長い列を写している。回復期と第二次大戦中の繁栄期を示す、その後の正式な統計によると、島の農業労働者の50%は1年間にわずかに4か月間⁽²¹⁾しか雇用されていなかった。このような数字は、経済危機が過ぎ去った後のものであったので、1930～35年の期間はおぞましいものであったのは疑いない。

流入した移民の性格とキューバの人口数が比較的になじめないために、資力が全くなく経済的な事情で働かざるを得ない状況にあったキューバに違法滞在中のハイチ人とジャマイカ人によくあったことだが、現地の労働者であれば拒否したような、契約上よりも安い賃金で働くことを受け入れた外国人によって、現地の労働者は駆逐されたのである。そのうえこうした不法滞在の労働者は従順なグループを形成していて、国外退去を恐れて、いかなる労働組合運動にも加わらず、ストライキを破った。このような情勢の下ですぐに、外国人排斥の空気が生まれた。そしてこのことは恐慌の時期に、定住した外国人労働者の一定の数を、自国民の労働者にとって代わらせることを目的とした、一般には50%法として知られる、1933年11月8日に公布

された、労働力自国民化法制定につながった。この措置は、その多くが年間常雇の職を有していたスペイン人の職が、キューバ人の職に置き換えられるように特別に仕向けられたものだった。この法は失業を解決しなかったし、それと対峙しようとしなかった。一つの人口のなかで、失業の重荷を同じ人口にあるもう一つの部分に置き換えただけであつた。季節的ではない常雇の職に適用されたので、もっぱらスペイン人の移民が働いていた都市部の商店や食料品店、零細企業などが影響を受けた。

恐慌時代のこれ以外の方法は、もっぱら砂糖産業に向けられたものであつた。1933年10月19日の法令は、生活手段がなくストライキ中のすべての外国人を強制的に国外退去させるものであつた。その結果、主にハイチ人とジャマイカ人がその対象となったが、これに携わったキューバ軍には、たくさんの暴力の逸話が残っている。しかし退去させられたハイチ人の数は10万人以下であつた。予備にとっておく失業中の労働者を確保しておきたい精糖会社が影響力を行使したため、スキャンダラスな方法は取りやめられたからである。

砂糖産業の精糖産業部門は全く異なる条件下にあつた。すでに指摘したように、播種から収穫までのサトウキビの農業部門は、前世紀と同様の手法を踏襲し、1914年の生産性は1814年のそれと事実上同じであつた。しかし、初歩的な方法で収穫されたサトウキビを搾汁する工業部門は世界中で最も新しく、最新の技術を持ち、より生産性の高いものであつた。キューバ経済の基礎である砂糖産業において、黒人の農業労働者が多数を占める初歩的な農業と、白人労働者の最新式の産業という不均衡は、社会に存在した二重性を際立たせていた。

工業部門の仕事は、農業部門では困難であつた労働者が団結する機会を生んだ。1917年には、工業部門の労働運動はとても進んでい

て、当時キューバの砂糖生産の30%を少し上回る量を生産していたシエンフエゴス地方において、いくつもの精糖工場を巻き込んだ一斉ストライキを呼びかける力を持つほどになっていた。スト参加者は基本的に賃上げと8時間労働を要求した。8時間労働は多くの都市ではすでに施行されていたが、従来からの12時間労働を二つのベッド、すなわち6時間労働2回にする慣習を守っていた。シエンフエゴスのストライキは、国全体に反響を生んだ。スト以前から、個別の精糖工場のストや労働騒乱はよく見られたが、これは重要な砂糖生産地全体に影響した、最初の団結した行動であった。労働者は要求したすべてのものを獲得したわけではないが、10時間労働、10%の賃上げ、いくつかの精糖工場では1930年代まで継続した代用通貨、すなわち引換券の廃止を手に入れた⁽²²⁾。

1914年から1920年の砂糖ブームののち、特に1923年から1933年の明確な価格下落の時期、キューバの労働騒乱は増加した。労働運動の活動単位は、経済危機の悪化と直に結びついて誕生した。大規模なストの後に砂糖産業労働者全国連合(SNOLA)が組織され、1932年12月に最初の会議が開かれた。にもかかわらず、労働運動の指導者自身が行った分析によると、こうしたストライキはキューバの砂糖生産の56%を占めるカマグエイとオリエンテには影響を与えず、多くのハイチ人とジャマイカ人の移民労働者を説得して支持させることはできなかった。このような移民労働者の90%が働くこれらの東部二地方で、右の事実は我々が繰り返し述べたことを際立たせことになる。すなわち、移民労働者の多数は、プランテーションに安価な労働力を提供するだけでなく、増加する労働運動に参加しないという安全弁の役割をも提供したのである。

経験のないほど砂糖価格が下落した1933年から34年、いくつもの重要な精糖工場は、労働

運動が事実上のロックダウンや収穫準備を妨害すると威嚇しながら要求した条件の受け入れを拒否した。状況は緊迫し、大規模な暴動の可能性が充満したが、組合側はこうした精糖工場の20を占拠し、幹部や支配人を拘束し、彼ら自身がソビエト〈評議会〉と呼ぶものを設けた。1934年9月、当時世界最大の規模であったハロヌ精糖工場に、そうしたソビエトの一つを設けた⁽²³⁾。政府は憲法上の保護を停止し、サトウキビ畑に火をつけたり、その他の怠業を行った犯人と断定されたものに対して、終身刑、死刑を公布した。このような抑圧的な措置が取られたいっぽうで、砂糖価格が上昇し労働環境があきらかに改善したため、危機は回避されたか、あるいは少なくとも危機の緊迫度は緩和された。

ある意味では、プエルトリコの土地—労働係数は、キューバの正反対を示している。1898年に北米の軍隊が二つの島を占領したとき、その人口密度は次のようであった。キューバ、1平方キロメートルあたり14.2人、プエルトリコのそれは107.2人であった。この大きな相違点が、両国のプランテーションの人口推移を説明していると考えられている。しかし一般的に言って、マルサス流の解説では不十分である。キューバとプエルトリコの相違点は、このような人口統計で説明できるよりも、より奥深いものである。1898年、キューバでは砂糖、プエルトリコはコーヒーが主要作物であった。コーヒーは砂糖と比較すると、労働力と投資資本は少なくて済んだ。コーヒー農園は平均面積では、砂糖プランテーションよりも小さかった。19世紀の後半30年間、プエルトリコではコーヒー生産が勢いよく増加し、砂糖生産は40%減少した。この生産物の転換は、コーヒー生産主要地である島の中央部と西部地方にいくつもの居住地を作ることを促した。同時に、刈り入れ労働者が季節により国内移動することを促し、

数は少ないがサトウキビ収穫のために平野部に移動する労働者が減少した。この結果、プエルトリコの生産者は人口過剰を口にし、他方サトウキビ生産者は労働者の不足を訴えた。

19世紀後半プエルトリコのコーヒー農園と多くのサトウキビ・プランテーションは奴隷が使役されていたと考えることができる。同時に、生産方法としての奴隷制は崩壊し、最終的には廃止された。土地－労働係数は、半奴隷状態の労働は考慮していなかったし、その上資本は不足していた。右のような条件の下で、平均的な農業の生産単位は小さくなる傾向があり（大部分は40～120ヘクタール）、労働者は大農園と賃金によるか、あるいは分益小作の取り決めによるか、あるいはコヌコス（conucos）、すなわち家族の紐帯を通して土地の一区画を自分の利益権として使用するか、あるいはこれらを組み合わせたものと結びついていた。1899年の統計ではプエルトリコの耕作地の50%が20ヘクタール未満の農場に属していた。したがって、真の意味で労働力の不足は存在しなかった。経済活動人口は散らばっていて、まとまっていなかった。そして多くの農業労働者は、契約に基づく賃金関係には程遠いものに置かれた。人口圧力は移民により緩和された。1870年代にはプエルトリコの労働者の集団はサント・ドミンゴの砂糖地帯への季節労働を開始していた。1880年代には、キューバ島定住者協会はこの人口移動をキューバのプランテーションに向かわせた。そしてプエルトリコがすでに北米の植民地であった20世紀初頭には、ハワイのサトウキビの刈り入れに向かう不運な移民が起きた⁽²⁴⁾。

かくして1898年に北米がプエルトリコを占領したことは、この島の経済・社会条件を根本的に転換させた。転換はとても急であったので、島の総輸出に占める砂糖輸出の割合は、3年間で30%から63%となった。島の経済の中心部分のこの自然な移動の結果は、以前の30年間

とはまさに正反対の、あわただしい国内移民の動きとなった。この人口移動は中心部と西部の山岳地帯から離れて、特に南部の海岸部への、サトウキビを生産する平野に近づくものであった。数年のうちに、これらのいくつかの地域では人口は倍以上に増加した。島の経済はもっぱら砂糖業者の利害に結びついたので、存在した人口圧力は、人口過剰が問題となった。すなわち、巨大な精糖工場を建設することを可能にするために生まれた、相対的な過剰人口である。

農業財産の配分、先述した砂糖大土地所有制の出現、サトウキビを生産する農地を最大限に活用する必要性、これらすべては所有する土地面積と現実には耕作する土地面積との間の不均衡を狭め、生存維持のための農業に向けられたコヌコスの土地を消滅させ、残存した奴隷を使役する古い製糖所を新しいプランテーションに組み入れることとなった。同時にコーヒーは事実上土壌の生産力低下が原因となり非常に早い速度で衰退し、1930年にはプエルトリコの輸出のわずかに1%を占めるのみとなった。古くからの労働関係の慣習は解消され、生存農業のための土地へのアクセスはなくなり、貧窮した農民は単なる農業労働者に零落した。

北米の投資家たちはプエルトリコの特にサトウキビ生産地において、人口希薄が支配的なキューバの地方とはまさに正反対の条件と対峙した。上に見てきたように、キューバは安価な土地が豊富なために、耕作面積を拡大する傾向があった〈外延的拡大〉。このため不足する労働力をより少なく利用することが可能となり、投下する資本投資から最大限の利益を生むことができた。プエルトリコでは不足していたのは土地であり、事実上の土地の占有となる、全土地を利用する政策だけでなく、集約農業を促進することとなった〈土地生産性の向上〉。このプロセスは、機械化、肥料などに巨額の資本を注入することで実現した。その結果サトウキビの

面積当たり収益性は顕著に増加した。いっぽう、面積あたりの生産性の上昇は、サトウキビの栽培と刈り入れについての労働量と、トン当たりのサトウキビ生産量に対する労働量の減少となった。

相対的な人口過剰、雇用源の枯渇、近代設備の導入など、こうした要因すべてにより、恐慌の時期の中ごろには、失業率は37%に達した。いっぽう失業水準の上昇は最終的には、抜本的な解決策を提示するところとなった。すなわち余剰人口の国外移民である。米国がドミニカ共和国を占領した1916年から1924年の間に、プエルトリコ人をこの国に植民させるというプロジェクトがすでに企画されていた。このプロジェクトは失敗したが、少なくともプエルトリコとドミニカ共和国に精糖工場を所有するサウス・プエルトリコ砂糖会社は、プエルトリコ人の余剰人員をドミニカにある精糖工場で使った。1920年代には、プエルトリコ人の労働者がキューバの精糖工場で働く確たる動きがあった。この移住を促進するための広告会社も設立された。設立されたばかりのキューバの労働者団体はこの広告会社を、スペイン系プエルトリコ人の労働者の指導者であるサンティアゴ・イグレシアス (Santiago Iglesias) に宛てた歴史的な手紙の中で非難した⁽²⁵⁾。

1910年から1930年の間に、プエルトリコ人の海外への移民は総数で4万6794人であった。1931年から1934年の間に、恐慌下にあった米国における失業が原因で、多数のプエルトリコ人が帰郷したが、1935年からは今日に至るまで、プエルトリコ人の国外移住が続いている。

サトウキビのプランテーションに最新のシステムを設置したカリブ海域のすべての国と同様に、プエルトリコでは多くの数の土地なし農民と零細農民は、農業労働者に転換した。この労働者は階級として、19世紀末に設立され

た自由労働者連合 (FLT) を通じてもっぱら活動した。1915年、FLT の政治部門の役を果たすプエルトリコ社会党が誕生した。1920年の選挙における、いくつかの市町村でのこの政党への支持票とサトウキビ栽培の偶発事件との間に、相関関係がみられる⁽²⁶⁾。この相関関係は、より急進化し一般的した一連の労働運動において、ある程度の階級意識が明瞭になったことを示唆している。恐慌の時期には自然に、悪化した労働条件に対する抗議の労働運動はより激化した。1931年から1932年に、10のストライキがあり3355人が参加した。1932年から1933年にはストライキは14、参加者は1万3594人となった。1933年から34年には、18のストライキに3万3333人が参加した⁽²⁷⁾。米国における労働争議に対処するためのニューディールの主要な措置の一つである1933年の全国産業復興法の成立は、最低賃金、最大労働時間、労働運動を認めることなどを企図した。これにより労働者と砂糖会社の間に慎重な休戦が生まれ、翌年に両陣営は島の砂糖産業における労働条件を規定する、最初の包括的で歴史的な一般協定に署名した。契約の保護により、各種の職務について20%から69%の賃金が引き上げられたが、産業復興法のために米国の食料品価格が相当に上昇したので、プエルトリコの平均的な労働者の食料費支出は58%上昇した。にもかかわらず、全体としては、特に第二次世界大戦中に砂糖価格が上昇したので、労働者の労働環境は改善した。

キューバとプエルトリコは砂糖産業における労働力という同じ問題について、二つの異なるカリブ海域の性質を表している。いっぽうドミニカ共和国は、現代の社会科学者の注目する三つ目の性質を提供している。失業率がとても高い国で、仕事を探すために国外移住する人口が際立つ傾向があるのと同時に、国内の精糖工場で働くために多くの外国人が流入していること

である。

もちろんいつもこうだったわけではない。19世紀末ごろのドミニカ共和国の人口密度は低かった。4万8442平方キロメートルの面積に、約61万人の住民がいた。これは1平方キロメートル当たり12.6人の割合である。農業構造は小さな農場を基盤としていて、農民はいくつかの方法で、土地の使用権あるいは所有権にアクセスできた⁽²⁸⁾。

一般的に、当時のドミニカ共和国の経済評論家たちは、タバコ、砂糖、コーヒー、カカオ、木材、果実、野菜などの農業の多角化の傾向から得ることのできる利点を強調する傾向も含めて、小規模農民の数の多いことの優位性を常に指摘しながら、自然の、農民の、あるいは生存水準の農業、小規模農家について語っていた。当時の書物は、このような独立した農民が、スタートしたばかりの砂糖会社にその労働を売る必要はなく、仮に働いたとしても、それは規則的なものではなかったと強調している。右を考慮にいとると、この国の砂糖産業の再生はそのスタート時点から、外国人の労働力に依存していたと理解できる。

イスパニョーラ島の最西端には、人口過密で世界で最も貧しいハイチ共和国が存在する。この二つの要因により20世紀の間、ハイチをアメリカ大陸で最も安価な労働力の供給源にした。それゆえ、ドミニカのサトウキビ生産者は国境を隔てて、その利益にとりもつとも好都合な労働力を有していた。しかしドミニカ共和国とハイチは何世紀もの間、政治社会上の対立で分け離れていた⁽²⁹⁾。

いっぽう当初は文化が異なるために、ドミニカ共和国にハイチ人労働者を導入する企図は拒絶された。そこでドミニカの生産者は精糖工場が必要とする労働力を、英領西インド諸島に求めた。したがって、北米の占領が開始された1916年までは、砂糖産業の外国人の労働者の大

半は、英語圏の小さなアンティル諸島出身者であった。公式な記録がないために、移民労働者の総数について比較的信頼できるデータは少ない。1920年代に入って、利用できる信頼水準の推計を可能にする公式な記録が始まった⁽³⁰⁾。とはいえ1912年と1920年の間には、おそらく年間平均の数字で約6000人の移民があったであろう。

しかし1916年から1924年の占領期の間に、北米の資本流入は増加し、すべての生産者が必要とした、合法あるいは非合法による、大勢の安価で従順な労働者であるハイチ人の絶え間なく増加する移民が始まった。当然のこととして、自国の文化価値とドミニカ農民の生存維持水準以下の賃金で働く外国人労働力（特に長年敵対していた国から）を輸入するという現実の経済との間の衝突は、絶え間なくかつ永続する国内の対立を生んだ。

キューバで50%法ができたのと同様に、精糖工場では自国民の労働者の雇用を要求する強力な運動が生まれ、当時ドミニカ共和国を統治していたトゥルヒージョ (Trujillo) 政権の外国人嫌い和大恐慌の影響も加わり、1937年にはハイチ人移民の1万2000人以上にのぼる虐殺事件となった⁽³¹⁾。

このような緊張関係にもかかわらず、ハイチ人は現在に至るまで、ドミニカのサトウキビの収穫では、圧倒的大多数の刈り入れ農民を形成している。なぜ高い失業率にもかかわらず、この現象が長引いているのかについての説明は、政治経済の複雑な要因に求めなければならない。その第一は、キューバの例ですでに検討した。砂糖産業の工業部門の生産性の上昇が天井に達すると、費用の削減は農業部門にますますより大きくのしかかる。ドミニカの生産者はキューバの同業者と同じように、短期間で農業革命を起こすのは不可能で、サトウキビの生産は原始的なものと同じような技術に頼っていて、費用の

削減は不可避免的に、農業労働者に可能な限り少ない賃金を支払うこととなった。国連によればハイチは世界で最も貧しい10か国の一つで、アメリカ大陸で支払われる最も低い賃金の中で、ハイチは最低であった。最低賃金の概念は相対的なもので、ハイチの最低はドミニカの最低を下回っていた。

ドミニカの大農園主はもう一つの利点を持っていた。この国の労働運動はカリブ海域のスペイン語圏では最も脆弱で、組織化された大規模なストライキ、ロックアウト、精糖会社に賃金引き上げを要求する抗議運動を執行することはできなかった。労働運動自身も同様に、抜け出すことのできない状況にあった。ハイチからの労働力の輸入と対決するには弱体すぎて、外国人労働者の大群はそのことをさらに脆弱にした。

サトウキビの刈り入れでハイチ人が多数を占め、かつ安い賃金だったことは、ドミニカ人農業労働者の間に、この種の労働に対するより否定的な反発を生み、ハイチ人に対して抱かれていた偏見をさらに増幅させた。しかし高い比率で、もっぱら米国に向けドミニカ人が移住したことで、人口圧力はやわらぎ、潜在的に爆発するようなストライキの環境を緩和した。かくしてドミニカ共和国では、カリブ海域では見られなかった、労働と移民現象の混合した関係が観察される。

結論

結論として、スペイン語圏カリブ海域では、サトウキビ・プランテーションには、はっきりと明確に分かれる二つの段階のあることを示してきた。第一は製糖所を含め、畜力による半機械化された、黒糖のような精製度の低い糖を生産していた、奴隷制に基づくプランテーションである。これは一般的な機能面では、奴隷はサトウキビ耕作地や厳密に呼称されるような製糖

所いかににかかわらず、無差別にあらゆる使役についたことを特徴としている。奴隷のほかに、労働者の中には中国人の農業労働者、数はずっと少ないが債務農業労働者がいた。第二に、近代的なプランテーションがあり、サトウキビの生産はするが、巨額の投資を前提とした、最新の技術を用いて標準化された粗糖を生産する、非常に効率の良い精糖工場とは結びついてはいなかった。その機能上の特異性の必然の成り行きとして、分業の結果、もっぱら農業部門としては懐古的な近代的プランテーションのままであった。この種のプランテーションでは、明らかに奴隷制以後の条件を採用してはいたが、単に空腹を満たすためかあるいは会社の周辺の商店でしか通用しない代用通貨で支払われる生存水準ぎりぎりの賃金によって、債務農業労働者を搾取する方法が支配的であった。技術上の観点では、いかなる進歩も見られない。その農法と農機具は古いプランテーションと同様に原始的で、同様に生産性は低かった。精糖工場はプランテーションとは異なり、当初からプランテーションと外国の精糖会社をつなぐ産業の仲介者となった。精糖工場はこのような外国の精糖会社に標準化された原料と Pol 96° 以下の砂糖である半製品を供給し、処理されたのちに、様々な種類の精糖製品が作られた。その後、精糖工場とプランテーションは互いに独立したものではなくなり、契約上の紐帯あるいは共通の資産として結合した。しかしどちらの場合でも、プランテーションを支配したのは精糖工場であった。プランテーションと結びついた近代の巨大な精糖工場は、特に今世紀初頭に投資を開始した外国の企業にとり、非常に利益のある事業であった。しかし精糖工場は、プランテーションで提供される仕事が季節的であるという性質が争議のもとになること、大農園を形成する傾向のあること、関係するプランテーションで意図的に粗放農業を継続したこと、またさまざまな

取引上の場面で経済社会的な支配力行使したことなどにより、労働上かつ政治上の問題を生み、操業していた国の主たる収入源かつ雇用源でもあったところも含めて、あらゆる住民から結局は不可避免的に排斥されることになったのである。農民組織と労働運動が経済危機の時に、外国企業の権力、大農園、絶え間ない資本流出を終わらせるように断固として要求した時、この排斥はより確かなものとなった。いっぽう純粋に経済的な面では、遅れた農業部門であるプランテーションと工業部門である精糖工場の対照性はますます大きな軋轢を生み、当初もたらせた投資の高い収益率を、最終的には台無しにすることになった。誕生したばかりの労働運動は組織力と団結力が強化されるにつれて、労働者の素朴な主張を続けるには障害となり、それゆえ〈雇用者側は〉賃金を上げざるを得なくなった。〈雇用者側〉の支出増加を補うために、肥料や灌漑、機械化の助けを借りて、原始的な農法を改善する必要が生まれたが、利益はさらに減少した。このような現地の要因と同時に、その他の外部要因もスペイン語圏カリブ地域のプランテーションの分断と凋落を促した。砂糖の国際価格と砂糖輸入国の国内市場価格の硬直性、特にヨーロッパなどの先進国の補助金を受けて大量に生産された砂糖、砂糖の一人当たり消費量の減少、これらすべてが砂糖の世界市場に好ましくない影響を与えた。この危機の頂点はまず新規投資の減少であり、長期的には〈外国企業の〉所有物が現地グループに売り渡されていったことである。そしていきつくところ、砂糖産業以外に投資することが、より高い収益を提供することになったのである。

【脚注】

- (1) プランテーションは、輸出（あるいは少なくとも生産地の外に）に向けた単一の一次産品を生産する

ために組織された生産単位で、それゆえ、一人の個人あるいは現地のグループにより所有されていても、外国あるいは外地市場により支配された。プランテーションは植民地的あるいは新植民地型の性質に依存する経済構造を持つ国または地域に存在し、技術や技巧の要素よりも、自然条件により恩恵を受ける、規模の経済に依存する、地味豊かな広大な土地を耕作する。様々な形態の農業プロレタリアが混在し、契約労働者、債務労働者、農業労働者、奴隷制の下に置かれた未熟練労働者をもつばら大規模に使役した。そのうえ、例えば農園 (*granja*)、小農園 (*rancho*)、農園 (*hacienda*) などの一つの生産単位が、プランテーションと見なされるには、このような性格の一部あるいはすべてを持たねばならない。1840年代にキューバ経済のなかでコーヒーの役割が衰退した以降、キューバに存在したプランテーションはサトウキビが唯一のものであった。プエルトリコでは、1870年代の奴隷制廃止以降コーヒーとサトウキビのプランテーションは農園に変化した。プランテーション・システムが回復したのは米国の占領下で、サトウキビだけであった。ドミニカ共和国ではこの時期、サトウキビ・プランテーションしか存在しなかった。したがって本研究は、対象とする1860年頃から1930年頃において、キューバ、プエルトリコ、ドミニカ共和国のサトウキビについてのみ取り扱うこととする。プランテーションとサトウキビ・プランテーションは同意語として使う。

- (2) 1 カバジェリア (キューバ) = 13.42ヘクタール
 1 カバジェリア (プエルトリコ) = 78.58ヘクタール
 1 カバジェリア (ドミニカ共和国) = 75.45ヘクタール
 1 トン (小トン) = 2000ポンド常衡 = 0.907メトリックトン
 1 トン (大トン) = 2240ポンド常衡 = 1.016メトリックトン
 本章の1トンは1メトリックトン、1000キロ。
- (3) Manuel Moreno Fraginals, *El token azucarero cubano*, La Habana, 1975, pp.13-16.
- (4) 1880年、キューバのサンタ・ルシア・デ・ヒバラ (Santa Lucía de Gibara) 製糖所は関連施設として、大型売店5軒、食料品店7軒、靴屋1軒、理容店3軒、蒸留酒製造所、薬局1軒、バー9軒、菓子店1軒、酒場2軒、工務店1軒、パン屋3軒、衣料品店3軒、仕立て屋2軒、装飾店1軒を経営していた。このような施設では、精糖工場が発行

- するニッケル製の代用通貨が使用できた。この事例が特に一般的な例といささか異なるのは、上のような場では、スペイン銀行が発行するキューバの公式な紙幣は利用できなかったことで、サンタ・ルシア会社の発行する代用通貨と、額面価格よりも10%割引いたレートで交換する必要があった。*Boletín Comercial* (La Habana, 14 de julio de 1886), p.2を見よ。
- (5) 一般的に19世紀の砂糖に関する統計は、錯綜した様相を呈している。最初のヨーロッパ市場の期首・期末在庫の一連の報告は、1872年のシーザー・チャルニコウ (Caesar Czarnikow) による有名な *Weekly Price Current* であるが、それ以前にも単発的な報告が発行されていた。またほぼ同時期に F.O. リヒト (F.O.Licht) の *Monthly Report on Sugar*, Willett y Hamlen の *New York Statistical Sugar Trade Journal* が発行された。こうした刊行物で発表される数字は、しばしば80%くらいまで相違した。
 - (6) 生産コストを下回るまで頻繁に価格が下落した1930年代の危機的な時に、生産量を調整し輸出割合を決めるための、最初の国際会議が開催された。1937年4月5日から5月6日にかけて開かれたロンドン会議で調印された国際砂糖協定は、初めて輸入国と輸出国を取り込み、輸出国に対して輸入国が一定の割合で輸入量を維持することを約束する最初の会議となった。しかしながら1968年の国際砂糖協定に先行する話し合いの会議で、ようやく途上国の基本的ないくつかの主張が取り上げられた。
 - (7) F.O. リヒト会社の一般的な説明については、1961年に同社の創立100周年を記念して出版された *Jubiläumsausgabe* を見よ。F.O. リヒトが用いたサンプリング方法と同時代の記録は、1890年9月13日に出版された *L'Economiste Français* の砂糖の項目にある。ロンドンのチャルニコウ会社に関する情報は Hurford Janes y H.J. Sayers, *The Story of Czarnikow* 1963を見よ。Czarnikow-Rionda 会社の記録文書は、フロリダ州 Gainesville のフロリダ大学ラテンアメリカ研究センターに保管されている。
 - (8) 米国の砂糖トラストの出現とその手段についての詳細な研究は、Alfred S. Eichner, *The emergence of oligopoly: sugar refining as a case study*, Baltimore, 1969, さらに Jack Simpson Mullins, “The Sugar Trust: Henry O. Havemeyer and the American Sugar Refining Company”, 博士論文, University of South Carolina, 1964 を見よ。
 - (9) A. Ellis, “Does speculation raise prices? ”, *The Economic Journal*, 1 (1891), p.197を見よ。
 - (10) Mullins, “The Sugar Trust”, cap. VII を見よ。
 - (11) 奴隷制における、奴隷所有者の収益性についての結論は、キューバの製糖所の簿記記録に基づく経済分析による。Manuel Moreno Friginals, *El ingenio*, vol II, La Habana, 1977, cap.1を見よ。1970年以前のキューバの砂糖産業に関するさらなるコメントは、Thomas, *HALC*, V, cap.5を見よ。
 - (12) Raúl Cepero Bonilla, *Azúcar y abolición*, La Habana, 1971, pp.39 y ss 〈次ページ〉 (otra ed.: Crítica, Barcelona, 1976)。
 - (13) プエルトリコの砂糖産業については、Andrés Antonio Ramos Mattei, “The influence of mechanisation in the system of sugar production in Puerto Rico, 1873-1898”, 博士論文, Universidad de Londres, 1977 と *La hacienda azucarera, su crecimiento y crisis en Puerto Rico (siglo XIX)*, San Juan 1981. さらに José Curet, *De la esclavitud a la abolición*, San Juan 1979 を見よ。
 - (14) キューバでは19世紀に砂糖の統計は2度しか実施されなかった。Carlos Rebello, *Estados azucareros relativos a la producción azucarera de la isla de Cuba*, La Habana, 1860 (明記されていないが、実際はニューヨークで発行された), *Noticias de las fincas azucareras en producción que existían en toda la isla de Cuba al comenzar el presupuesto de 1877-1878*, informe publicado en *La Revista Económica* (La Habana, enero de 1877), pp.60 y ss に掲載。
 - (15) 1877年については注14を参照。1895年のデータは、*La relación de los ingenios de las provincias y datos relativos a los mismos*, Matanzas, 23 de septiembre de 1895 (registro compilado por orden de las autoridades provinciales) を見よ。手稿は Archivo Histórico de Matanzas 所蔵。
 - (16) Mullins, “The Sugar Trust”, pp.32-33.
 - (17) Noël Deerr, memorándum, *Condiciones de la industria azucarera en Cuba*, La Habana, 1913.
 - (18) Arthur D. Gayer, *The sugar economy in Puerto Rico*, Nueva York, 1938, p.97.
 - (19) 同上書 pp.103-105.
 - (20) 匿名 (Anónimo), *The Present State of the Sugar Plantations considered, but More Especially that of the Island of Barbados*, Londres, 1714, p.27.
 - (21) Julián Alienes Urosa, *Características fundamentales de la economía cubana*, La Habana, 1950.
 - (22) ストライキについての興味深い年代史は、John Demoulin, *Azúcar y lucha de clases*, La Habana, 1980.

- (23) おそらくラテンアメリカも含めて、キューバでソビエトという言葉が地方の農民、労働者会議として使用されたのはこれが最初である。
- (24) この時期のベネズエラのコヌコスと農園に関する研究は、Gastón Carvallo y Josefina Ríos de Hernández, *Notas para el estudio del binomio plantación-conuco en la hacienda agrícola venezolana*, Caracas, 1977を見よ。
- (25) 労働者の新聞である *Justicia* (La Habana, 16 de diciembre 1922), pp.1-7で初めて発表された。
- (26) Ángel Quintero-Rivera, *Conflictos de clase y lucha política en Puerto Rico*, San Juan, 1977, Quintero Rivera, *HALC*, IX, cap.6も見よ。
- (27) Gayer, *Sugar economy in Puerto Rico*, p.223.
- (28) キューバとプエルトリコは、我々が考察しているこの時期に関して、農業を基盤とする特徴を有している。にもかかわらず1920年代まで、ドミニカ共和国には土地所有の分析に不可欠な土地登録がなかった。このため現在までのすべての研究は、ある地方のあるいは特定の経済活動にかかわる、一般的に正確さにかける性質を有する部分的な調査に基づいている。いずれにしても、土地登記の欠如はそれ自体が、経済活動をするうえで土地が決定的な要素ではなかったという状況証拠となる。しかしながら、北米の占領開始直後から、サトウキビの栽培地が拡大し、小規模農園主との間に紛争が起きると、近代的な農業土地台帳が必須となった。
- (29) 1870年以前のドミニカ共和国とハイチの関係については、Moya Pons, *HALC*, V, cap.4を見よ。
- (30) José del Castillo, “La inmigración de braceros azucareros en la República Dominicana, 1900-1930s”, *Cuadernos del Centro Dominicano de Investigaciones Antropológicas*, 7 (Universidad Autónoma de Santo Domingo), 1978, Patrick Bryan, “The transformation of the economy of the Dominican Republic, 1870-1916”, 未刊行博士論文, Universidad de Londres, 1977を見よ。
- (31) 公式の説明では、このエピソードは武装したハイチ人がドミニカ共和国に侵入したとしている。その後大統領となる Joaquín Balaguer は国務大臣の職にあった1945年に、1945年10月11日付、ボゴタの *El Tiempo* 紙の編集者 Roberto García Peña宛ての手紙でこの見解を述べている。Andrés Corten y otros, *Azúcar y política en la República Dominicana*, Santo Domingo, 1976, p.32.

** p.1より

『砂糖大国キューバの形成』

目次

1章 プランテーションへの道程

2章 搾汁所から大工場手工業へ

3章 上部構造の危機 [1792~1819]

4章 拡大と環境の変化 [1800~1860]

5章 技術、経済面での注釈 [1800~1860]

6章 労働力市場 [1790~1860]

7章 Trabajo y Sociedad 未訳

8章 Un Paréntesis Commercial 未訳

9章 Economías y Sociedades de Plantaciones en el Caribe

Español 今回訳

Apéndice